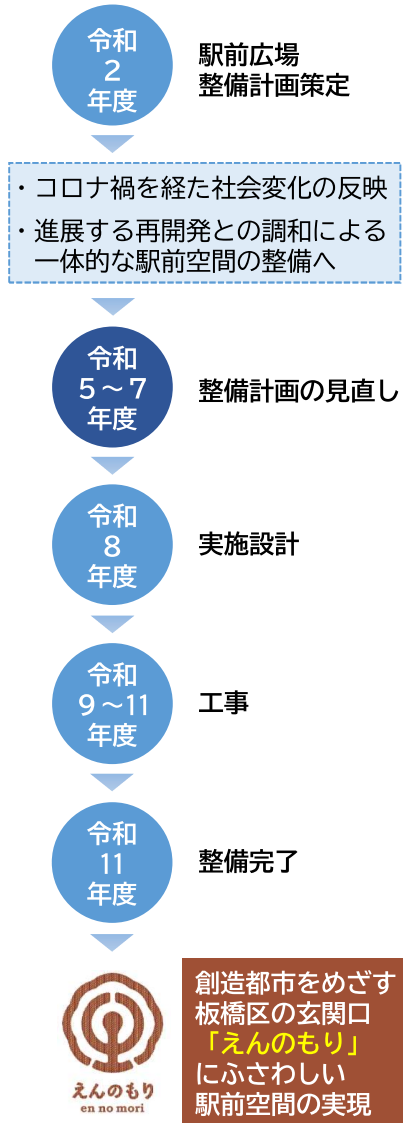


1 駅前広場の再整備について

再整備の目的

板橋駅西口駅前広場は、現在の形態となってから約50年が経過し、施設が老朽化している。駅前広場の再整備により、交通面の課題解決を図ったうえで、シンボル「むすびのけやき」を活かした緑豊かな滞留空間を、再開発事業と一体となって整備することで、「創造都市」をめざす板橋区の玄関口にふさわしい、多様な活動やつながりを育む空間の形成をめざす。

2 再整備に向けた事業の流れと区の主な取組



・コロナ禍を経た社会変化の反映
・進展する再開発との調和による一体的な駅前空間の整備へ

取組① 再整備計画の策定

令和7年2月 整備計画（進捗版）公表

○車中心から人中心の空間へ
車の空間をロータリーに集め、歩行者の空間と分離することで、歩行者にとって、より安全で心地よい空間を形成する。

○緑の中でおおらかに混ざり合う広場
通行空間と滞留空間が混ざり合い、誰もがみどりの中で快適に過ごすことができる空間とし、地域の愛着を醸成する。

地域意見を踏まえた、計画内容の改善策の検討
・踏切付近の転回対策 ・治安対策 ・消防活動への備え
・グリーンロードの交通円滑化 ・周辺道路の安全確保
・夜間のバス停のタクシー乗り場としての転用 等

→項番3のとおり、進捗版の内容を更新したうえで、「板橋駅西口駅前広場再整備計画」として今回策定

取組② 地域説明会の開催（個別説明を除く）

令和7年3・7月 オープンハウス（計4日、176名）
令和7年8月 まちづくり全体説明会（2日、98名）

取組③ 情報発信と意見の収集

令和7年7・11月 ニュースの全戸配布（約5,000戸）
令和7年7月 計画案へのアンケート（88件）
令和7年7月 子どもワークショップでの意見収集
令和7年11月 区公式ホームページにQ&Aを掲載
令和8年度～ 3D都市モデルによる発信（予定）

取組④ 社会実験の実施（予定）

令和8年度 道路線形変更の社会実験（予定）
令和9年度以降 タクシー乗り場の移設実験（予定）

取組⑤ 区民の活動を育む公民連携の体制づくり

令和7年度 区民・再開発事業者とのワークショップ（えんのもりスクール）の開催（全5回）

取組⑥ ウォーカブル・ユニバーサルデザイン

令和7年9月 ユニバーサルデザイン推進協議会
令和8年度～ まちなかウォーカブル推進事業の活用
令和8年度～ ウォーカブル戦略（交通戦略）の検討

3 再整備計画の策定にあたり更新した内容（計画本編は、参考資料1のとおり）

公民連携による空間の一体整備（P.5～6）

区が進める駅前広場整備と民間が進める再開発事業が連携し、空間を一体的に整備することで、歩行空間や植栽の充実を図り、より歩きやすく、みどり豊かなウォーカブルなまちを実現します。

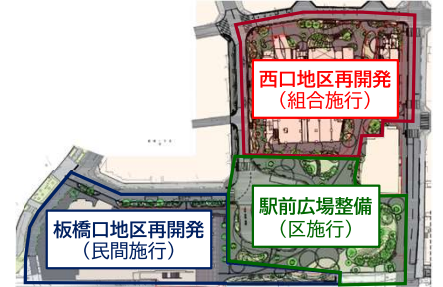
一体整備の効果（例）

歩行空間や植栽の一体整備の比較（イメージ）

■公民で別々に整備した場合 ■公民で一体に整備した場合



植栽を、道路と建築敷地で別々に配置せず、まとめます。舗装のしつらえも統一して、デザインが調和した空間を実現します。



人の目線の高さ（アイレベル）を意識した空間整備（P.7～8）

① 乗換え動線への自然な誘導

■JR板橋駅の出口から見る駅前広場



ロータリー越しに新板橋駅方面への視線の抜けを確認し、緩やかなカーブを描く動線に自然に導きます。

② 広場の中心に、けやき・番屋を配置

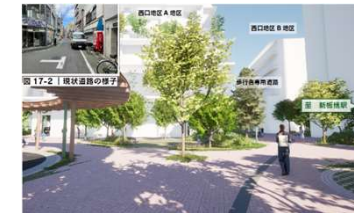
■動線の先に見える、むすびのけやき・番屋



シンボルツリーが、駅前の風景の中心となり、足元に見守りや情報発信の拠点となる番屋を配置します。

③ 安全な歩行空間の先に見えるにぎわい

■駅前広場から、にぎわうまちへと引き込む視線



車道を横断せず、誰もが安全に歩行できる空間の先に、店舗のにぎわいがあられ、回遊を促します。

④ 心地よく過ごせる、みどりの空間

■むすびのけやきの緑陰・ベンチや広場のみどり



思い思いに過ごせる、居心地の良いみどりの空間は、災害時やイベント時にも活用できる空間となります。

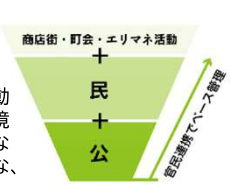
統一的なデザイン方針（P.9～10）

広場レイアウト	デザインの調和が、まちの価値を高め、わかりやすさや安心感を生み出します。
植栽計画	
防災・減災	
マテリアル	
サイン計画	
照明計画	

利活用・維持管理の仕組み（P.11～12）

公民の各主体が連携して、空間の利活用や維持管理の仕組みを整えます。

日常的に区民が憩い、活動する場となり、豊かな環境を守る取組にも、義務感なく自由に参加できるように、開かれた場をめざします。



板橋駅西口駅前広場再整備計画

えん の もり



えん の もり

ここ板橋は江戸時代より日本橋から数え
中山道第一宿として栄えてきました。

人々が往来し、人と人が出会い、
様々な「もの」や「こと」が
縁あって結びつくところ。

涼やかな緑とともに人を見守り、
人を清らかにし、人に生気を
与えてくれるところ。

「ここへ来れば、気持ちが晴れる。」

「ここを通ると、気持ちが洗われる。」

板橋の玄関として、

多くの人にそう思われ

慕われていく場所でありたいと思います。



板橋区の玄関口のリニューアルに向けて、駅前のエリア全体を「えんのもり」と名付けました。人々が出会う宿場町としての歴史、縁がつながり新しいものに出会える学びの場、杜のようなみどりいっぱいの空間、地域の活動やまちの見守りといっためざすべき場所のイメージをネーミングに込めました。

森・環境・まち

約68万人近い人々が通勤通学で訪れる駅前は、区が今後取り組んでいられる豊かな環境を育て、守って共に維持し、高めていきます。まあるい仕組みをつくり、職能を含めて人々の暮らしを支える。板橋区の玄関口という立地を活かして





づくり

通過する埼京線。その車窓から見える森のような豊かな緑に包まれ、「緑によるまちづくり」を体現する場所になります。新たに生み出していくために、行政と再開発とが役割を分担しながら、場所の価値を、区民が義務感なく、自由に、この場所を活用し、手入れに参加できるように育てることで、地域産業を継続させるきっかけをつくります。板橋区、区のまちづくりを展示する場をめざします。



地域活動・見守り

新しい駅前広場は、車中心から人中心の安全で、居心地のよい空間へとリニューアルします。新旧のコミュニティをつなぎ、「むすびのけやき」を中心に、地域活動による活気溢れる駅前をめざします。4F公益エリアと運動した活動の拠点駅前広場内にも設け、周辺の商店街、町会、再開発と地域のお祭りなどでの連携も進めます。また、新しい駅前広場は、常日頃から人目があり、見守りされているような安心感のある場をめざし、幼児から高齢者、身体障がい者、生物、植物まで、誰もが自由にアクセスできる場所をめざします。



学び（縁・出会い）

板橋口地区4Fに整備される公益エリアは、駅前広場や既存施設、再開発と連携した施設で、目的ごとに空間を設けるのではなく、マルチファンクショナルなオープンスペースをつくり、テーマに合わせて空間を可変させることで、常に新しさがあり、マルチファンクショナルなオープンスペースをめざします。ホールでの会議や学会での利用はもちろん、地域の方々が講師になった“人と出会える”ミニレクチャーなど、学びにつながるような地域活動を支えるとともに、小・中・高校生たちが日常的に勉強する場所としても利用できる設えにしています。



まちの課題解決

車中心から人中心へ、駅前広場の更新を行います

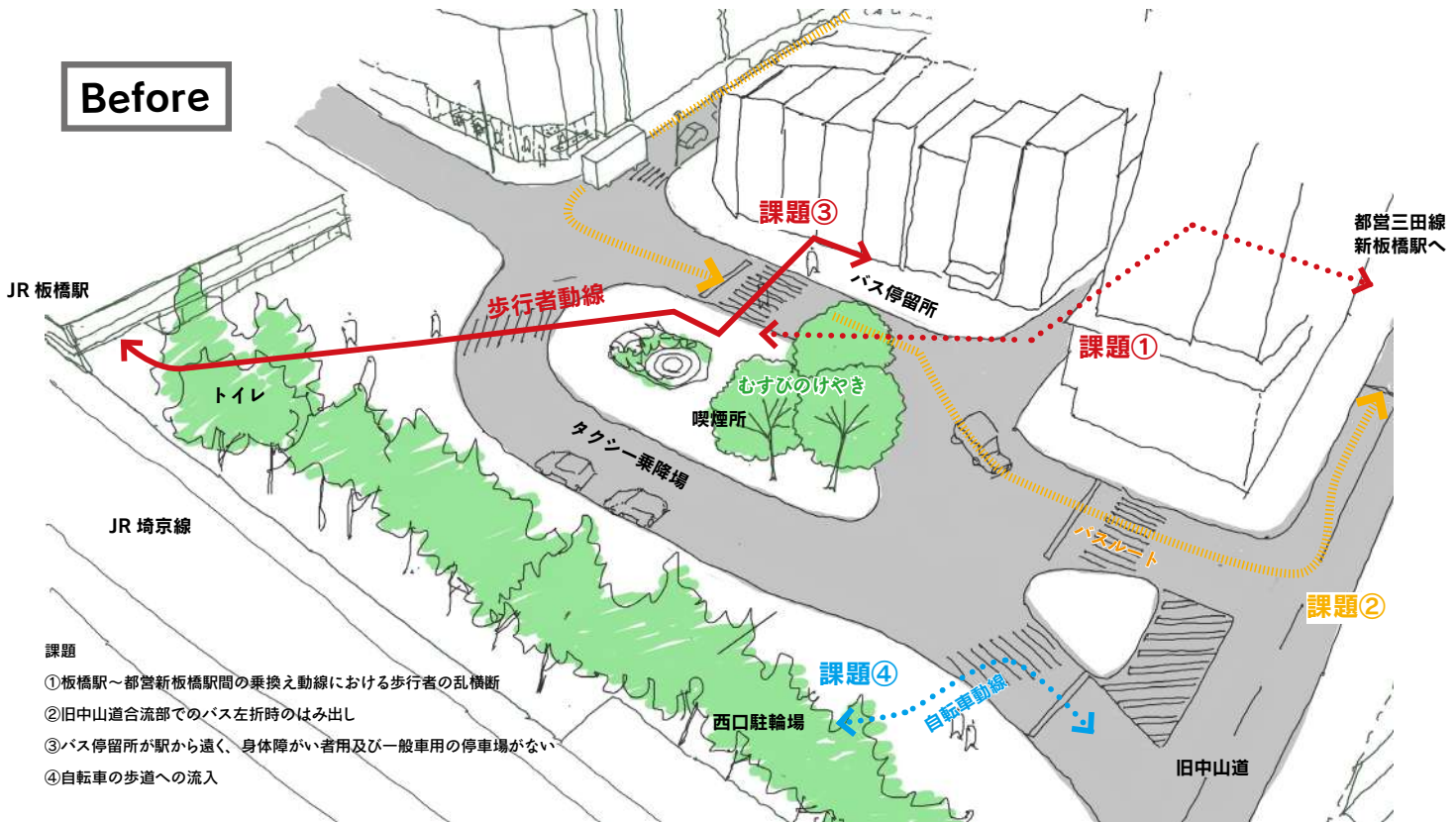


図1 | 現在の駅前広場

板橋駅西口の駅前広場は、昭和43年頃に献木されたシンボルツリー「むすびのけやき」とともに、区民の皆さまに親しまれてきました。しかし近年、ゲリラ豪雨や首都直下型地震等の都市型災害のリスクが高まり、また、人口減少やコロナ禍を経て価値観が変化をする中で、自動車交通をさばくことを意図した「車中心」の空間から、居心地の良い日常空間でありながら災害への備えを持つ緑豊かな「人中心」の駅前広場へと更新していくことが求められています。

現状の主な課題としては、① JR 板橋駅～都営三田線新板橋駅間の乗換え動線における歩行者の乱横断、② 旧中山道合流部でのバス左折時のはみ出し、③ バス停留所が駅から遠く、身体障がい者用及び一般車用の駐車場がないこと、④ 自転車の歩道への流入などがあります。

これらの課題の解消や、今日的な社会ニーズへの対応に向けて、現況の交通量調査、地元の方々へのヒアリング、交通事業者・交通管理者との協議、区民の皆さまとのワークショップでの意見を元に、安全で利便性が高く、居心地の良い駅前環境を実現すべく、再整備計画を策定します。

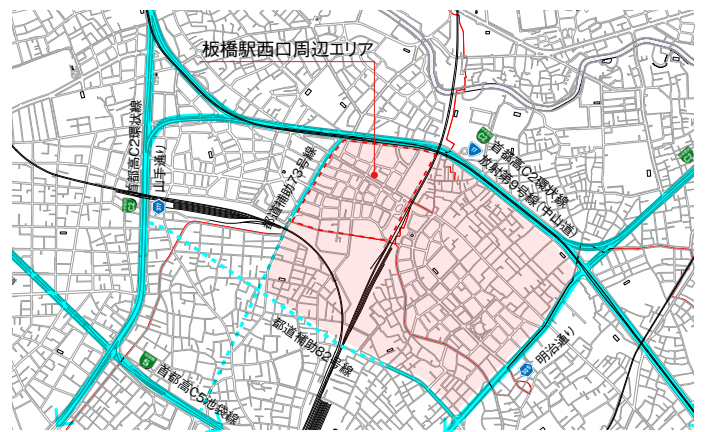


図2 | 板橋駅西口周辺エリアの交通計画上の位置づけ



図3 | 道路内の乱横断の様子



図4 | 旧中山道部のバス左折時の様子

デザインコンセプト

緑の中でおおらかに混ざり合う駅前広場

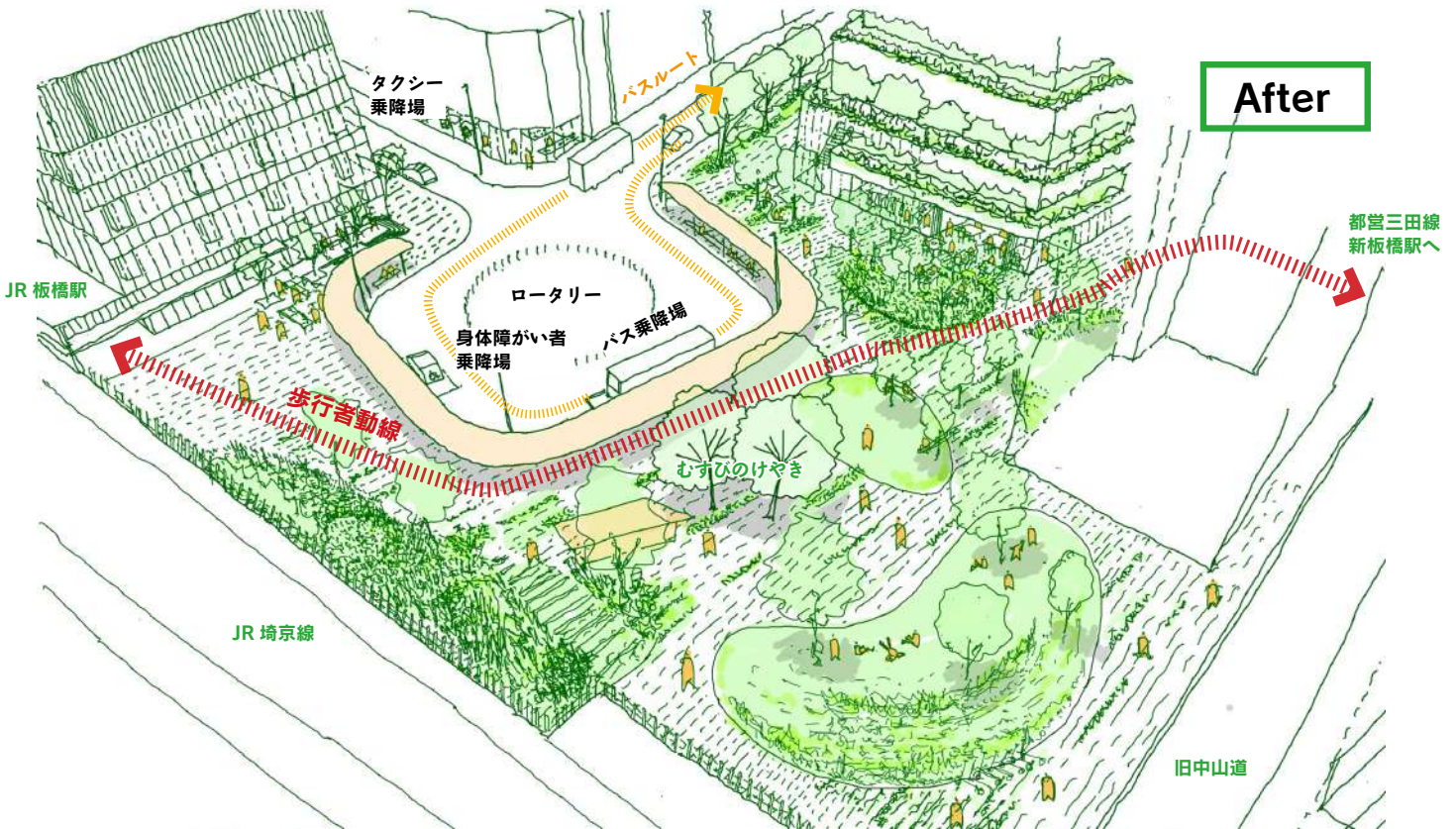


図5 | 新しい駅前広場のコンセプトスケッチ



図6 | これまでの駅前広場の「車中心」の考え方



図7 | これからの駅前広場の「人中心」の考え方

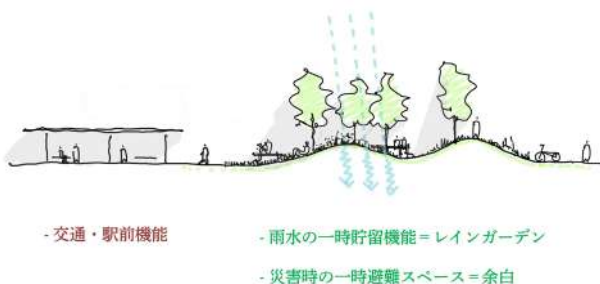


図8 | これからの 駅前広場が果たすべき役割

新しい駅前広場は、人中心の駅前広場です。これは地区計画の目標として定められた「緑豊かな環境」を駅前広場で実現するものです。豊かな緑の整備が循環型社会のシンボルとなり、同時に都市型災害に対する地域レジリエンスを高めるように、2つの再開発事業と一体となったインフラ整備をめざします。

豊かな植栽計画に合わせて、広場全体が地域活動の受け皿となり、地域コミュニティ醸成の場となっていくために、キャンピー（庇）により夏場の涼しい滞留空間を確保し、再開発の商業施設と連携した庇空間の整備を行っていきます。また、情報の整理についても力を入れていきます。駅間移動のわかりやすさを向上させる案内誘導サイン、中山道の歴史を伝える街道サインなど、利用者の目線で使いやすい空間整備をめざします。

交通機能の改善だけでなく、誰もが快適に、時に一人でも静かに過ごすことができる快適な空間に生まれ変わる駅前広場は、新しい時代に向けた先駆的な取組となるでしょう。

区民の創造的な活動があふれる空間が、人と人とのつながりを育み、創造都市をめざす板橋区の玄関口にふさわしい、駅前広場を実現していきます。

設計プロセス

駅前広場の使い方のアイデアを 区民の皆さんと一緒に考えてきました

令和6年度は、6月、8月、10月の計3回「板橋駅西口駅前広場の未来を考えるワークショップ」を開催しました。過年度にいただいた意見とワークショップでいただいた意見を整理し、再整備計画や設計内容に反映しました。

また、板橋口地区・西口地区の両再開発事業者ともワークショップを開催し、広場への商業からのにじみ出しやイベント開催に向けた法的整理と空間の運用方針、サインの連携等について話し合っています。利用者にとって使いやすい駅前空間とするため、今後も話し合いを重ねていく予定です。



図 10 | 駅前広場の未来を考えるワークショップの様子

2019年 板橋駅西口周辺地区まちづくり勉強会
駅前広場検討部会ワークショップ



2024年 板橋駅西口駅前広場の未来を考えるワークショップ

第1回

A ~ D の4班に分かれて、新たな駅前広場(周辺エリアも含む)で、自分で/みんなで「やりたいこと」をアイデア出して共有しました。過年度のアンケートやWSなどで得られた区民の皆様からの意見も含め、運営側でグルーピング・図式化しました。

第2回

第1回で出していた「やりたいこと」のアイデアをまとめたシートにさらにアイデアを重ねました。また、模型を囲み、具体的な場所をイメージしながら利用している姿やレイアウトを考え、そのために必要なしつらえについても意見をかわしました。

第3回

前2回のWSを通じていただいたアイデアを整理・図式化したシートと、行為や活動がプロットされた模型などをご覧頂きながら、「いいね」と思うものを皆さんと共有し、実現に向けた「課題」を出し合いました。様々な世代からの具体的な意見が議論されました。

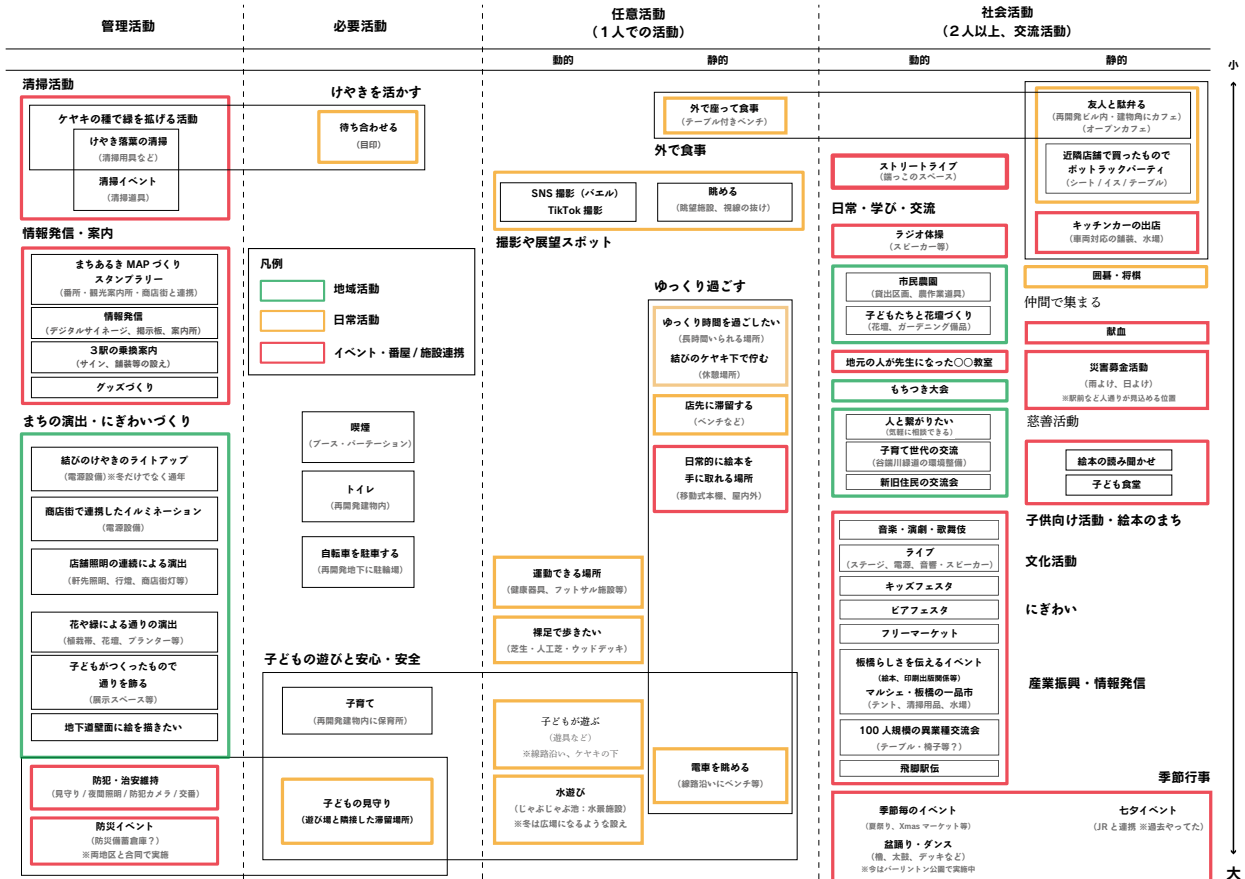


図 11 | 第3回ワークショップ資料(過年度の意見とR6年度ワークショップでの意見の重ね合わせシート) ※板橋区役所HPからもご覧になれます

西口周辺エリア一体整備プラン

官民境界を越えて一体化した屋外空間の実現 誰もが歩きやすく、みどり豊かな駅前エリアに

今回の再整備では、ベビーカーも、車いすも、高齢者の皆さんも、誰もが心地よく歩ける駅前を実現します。

通常の開発では、道路と建築敷地は行政と民間で所有者が異なるため、境界で区切られて別々に計画・整備されることになります。そのため、境界には排水の溝が設置され、ベビーカーや車いす利用者にとってバリアになることがあります。また、舗装の素材や色が異なったり、植栽が重複して配置されることもあります。その結果、歩行者にとって歩きにくくなり、十分なスペースが確保されないことで、植栽の生育環境も悪くなります。

歩きやすい空間を実現するために、駅前広場に隣接する板橋口地区・西口地区・きらぼし銀行地区の三地区と連携することとしました。舗装デザインを揃え、植栽を歩道と車道の間にまとめることで、豊かな植栽帯を実現します。この植栽帯が歩行者と車の間に適切な距離を確保し、歩行空間の安全性を高めます。また、建築敷地の一部の排水を道路側で処理することで、敷地境界部の排水の溝をなくし、誰もが歩きやすい歩道空間を生み出します。周辺道路においても、交通の変化を見据えて安全対策を検証し、必要な工事を行っていきます。



図12 | 官民境界を越えた屋外空間の一体整備の考え方



図13 | 通常の道路と建築敷地とが別々に整備される場合

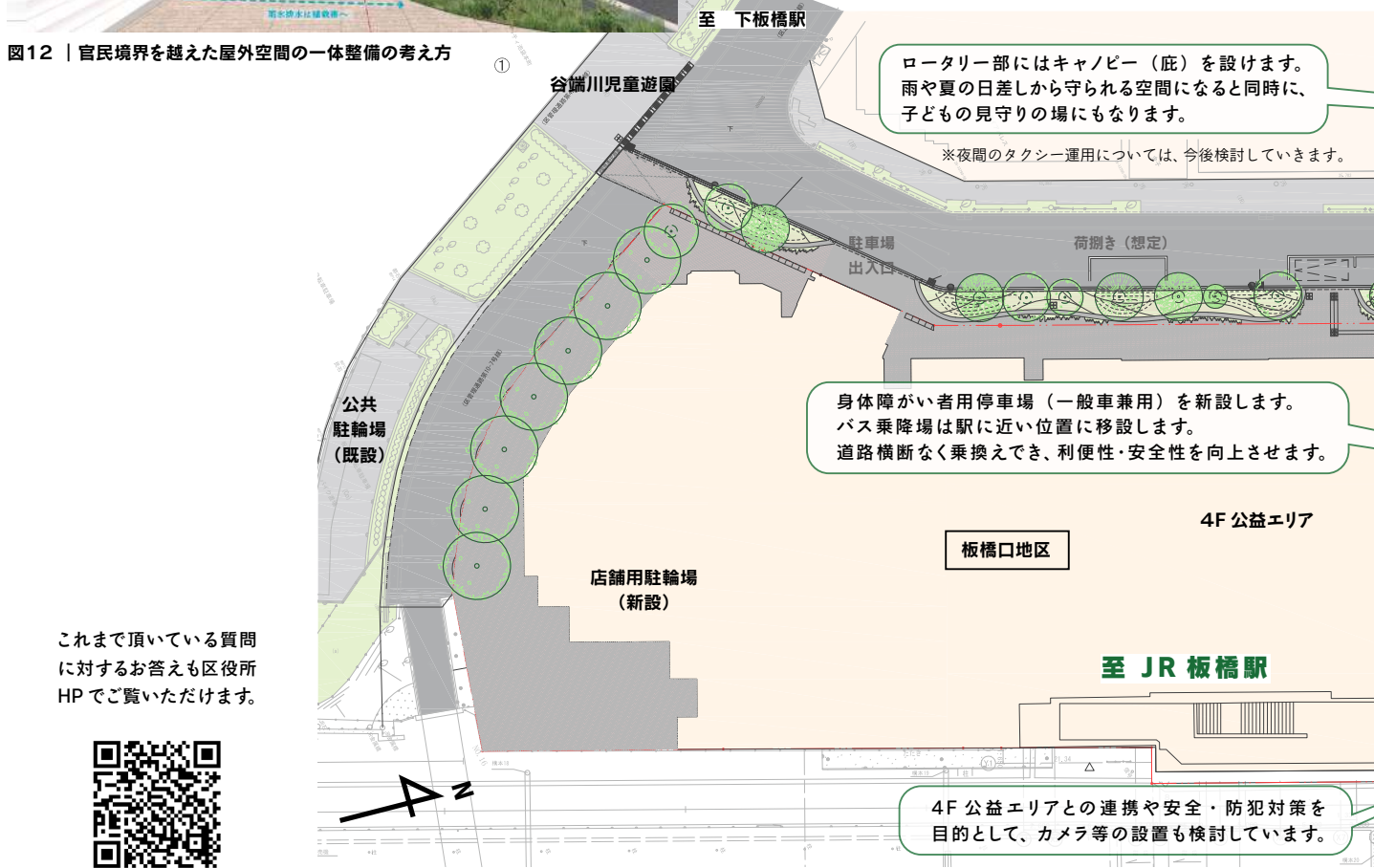


図14 | 板橋口地区・西口地区と西口駅前広場との一体整備に向けたマスタープラン S = 1/300

これまで頂いている質問
に対するお答えも区役所
HPでご覧いただけます。

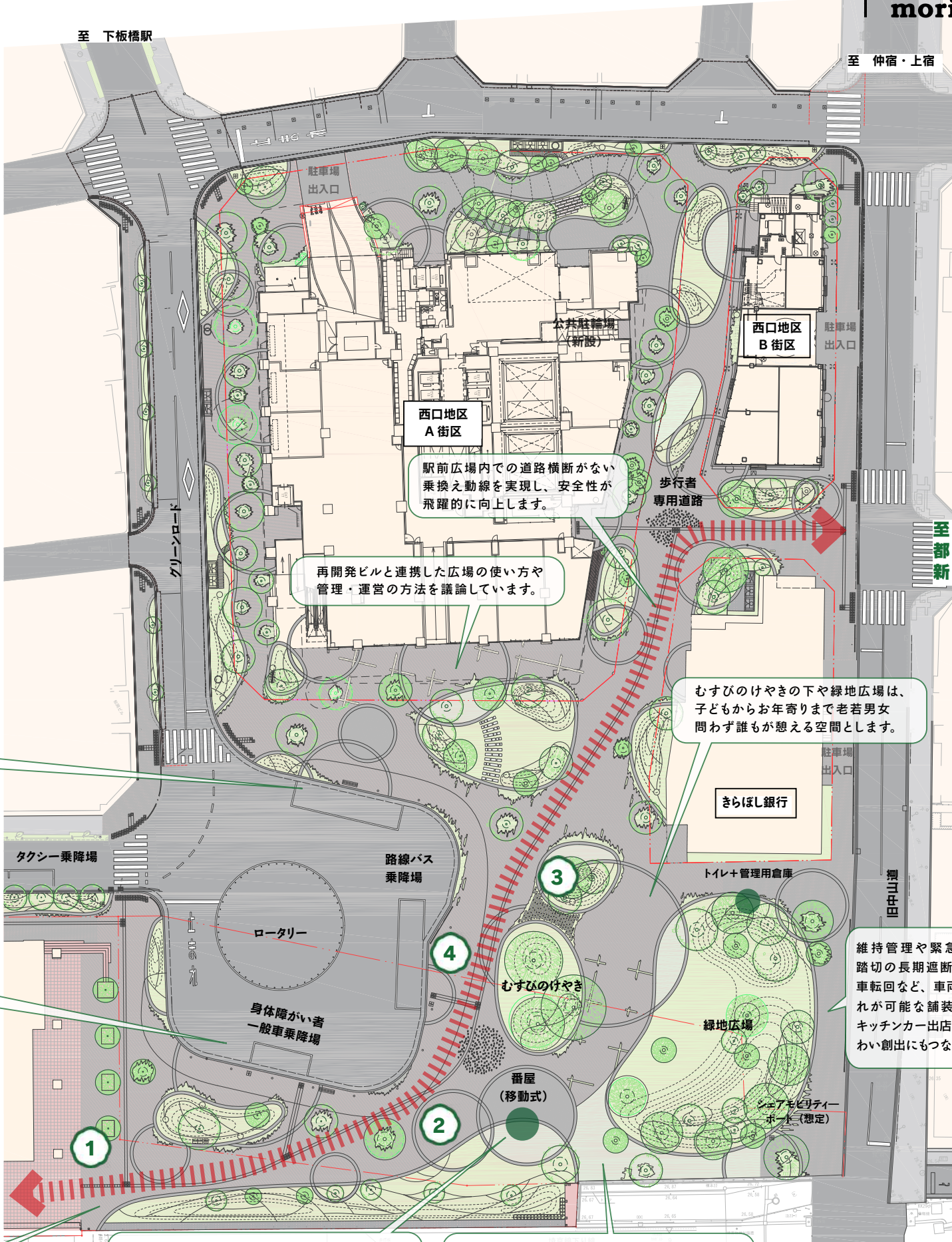


至 下板橋駅

至 仲宿・上宿

至 都営三田線
新板橋駅

至
ハイライフ
プラザ



西口地区 A街区

駅前広場内での道路横断がない乗換え動線を実現し、安全性が飛躍的に向上します。

再開発ビルと連携した広場の使い方や管理・運営の方法を議論しています。

むすびのけやきの下や緑地広場は、子どもからお年寄りまで老若男女問わず誰もが憩える空間とします。

維持管理や緊急の車両、踏切の長期遮断時の一般車転回など、車両の乗り入れが可能な舗装とします。キッチンカー出店など、にぎわい創出にもつながります。

1

公益エリアと連携する拠点施設として、移動式の番屋を設けます。
(情報揭示 + 管理用倉庫 + 見守り + 道案内 + 災害時連携)

2

既存駐車場を撤廃し、歩行空間への自転車の流入をなくすことで、安全な駅前広場をめざします。
(駐輪場は再開発ビル内に新設)

※基本設計段階のものであり、今後詳細設計で変更になる可能性があります。

視線に抜けをつくり、歩きやすい空間を実現します

1 乗換えがしやすい 誘導のデザイン

JR 板橋駅を地上に出ると、ロータリー越しに都営三田線新板橋駅方面へ視線が抜けます。ロータリーの北側へ向かう動線を緩やかなカーブとし、人々を自然に導くことで、安心できる乗換え動線を実現します。

線路沿いの緑地は、騒音の問題や安全性にも配慮しつつ、鉄道との適度な距離感をつくり、倒木による鉄道への支障が生じないように植かえることで、適度に視線が抜け、閉鎖的で暗いイメージにならないように計画しています。こうした計画により、見通しがよく、迷いにくい駅前になります。



図 15 | JR 板橋駅からの駅前広場

2 小さな管理拠点と 樹木の継承

歩みを進めると、広場の維持管理に関する情報掲示や、道具倉庫となる番屋が見えてきます。番屋は小さな管理の拠点です。日常は見守りや道案内を行い、災害時は周囲の災害対策施設と駅前広場の連携を支えます。

現在、アクセスしづらい位置にある「むすびのけやき」は、駅前広場整備時に献木され、今ではまちのシンボルになっています。この樹木を継承し、生育環境の改善も行いながら、次の50年、100年に向けた駅前広場の風景づくりの象徴として活かしていきます。



図 16 | 番屋とむすびのけやき

3 車道を歩道にして、 安全な乗換えを

ロータリーのバス乗降場を左手に見ながらまっすぐ進むと、西口地区エリアの境界にたどり着きます。西口地区 B 街区の手前を右に曲がり、北に進むと新板橋駅が見えてきます。西口地区 A 街区と B 街区の間は現在車道となっていますが、ここは歩行者のための空間（歩行者専用道路）に生まれ変わります。こうすることで、歩行者と車が交わりにくくなり、安全に乗換えができる駅前広場となります。

駅前広場に面した屋外空間や、両側に店舗が並ぶ歩行空間は、さまざまな活用を想定しています。沿道の店舗と屋外空間が連携しながら、にぎわいのある駅前をめざし、回遊性を高めていきます。



図 17-2 | 現在の様子

図 17-1 | 駅前広場から歩行者専用道路へ

4

高い緑被率で、心地良い駅前を

※板橋区全体での緑被率は約 19%（令和 6 年度調査）です。
東京 23 区緑被率は、最も多い自治体でも約 25%といわれています。

「むすびのけやき」のもとにはベンチを設置します。そこは、待ち合わせやバスを待つ間などに、緑のかけで、木もれ日や四季の移ろいを感じながら一息つける場所に生まれ変わります。背後に広がるみどり豊かな開けた空間、起伏のある緑地広場が、旧中山道（車道）との関係をやわらかくつなぎます。また、このエリアは、日常では静かに過ごすことができる一方で、イベント時や災害時には周囲と連携して活用できる場所となります。

今回の再整備で、現状の緑被率*約 9%から緑被率約 34%という都内でも類を見ない駅前広場となります。必要な範囲のみを舗装し、それ以外は土や緑にすることで、夏場の地表面温度上昇を抑え、涼やかな風をまちへと送ります。また、心のみならず身体にもやさしい快適な空間をめざし、ビオトープなど子どもたちの環境教育の場としても活かしていきます。



図 18 | むすびのけやきと背後に広がる緑地広場

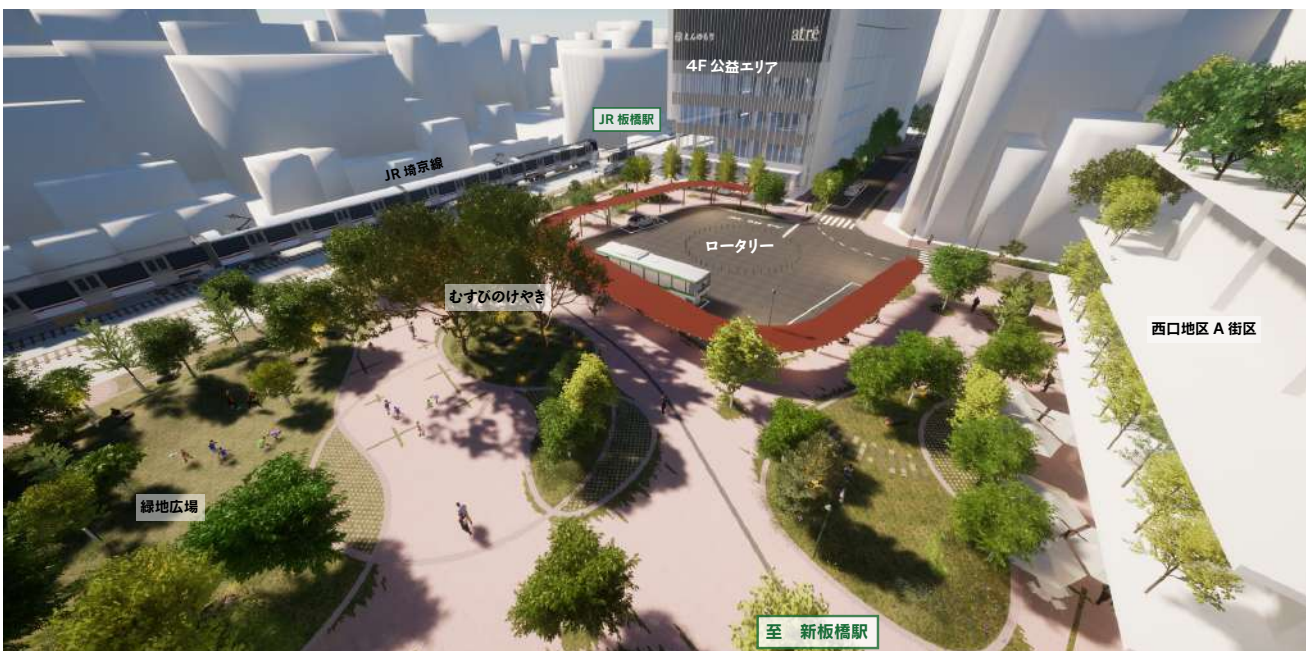


図 19 | 駅前広場の鳥瞰（北側より）

※基本設計段階のものであり、今後詳細設計で変更になる可能性があります。

デザイン方針

乗換え動線のわかりやすさと心地よさ・安心感が共存した広場

広場レイアウト

わかりやすく、心地よく、安心できる広場

JR 板橋駅側と新板橋駅方面が、互いにロータリー越しに見通せることで、乗換え動線が分かりやすくなります。複数年にわたるさまざまなワークショップの意見も踏まえ、日常におけるベンチの配置や通り道、イベント時などの使い方をシミュレーションし、全体の配置計画を行いました。それぞれの空間が視線でつながることを意識し、死角ができれば、人の視線に見守られている感覚が安心感を生む広場のレイアウトとしました。

植栽計画

武蔵野の植物たちでつくる風景

板橋には、北部の荒川低地、中央部の武蔵野台地、南部の中小河川と谷戸という、大きく3つの風景があり、それぞれに合った植物の環境があります。新しい駅前広場では、武蔵野にもともとあった樹木や草花を基本にしつつ、にぎわいの場の近くには園芸種も取り入れ、板橋らしさとにぎわいが共存する風景づくりをめざします。また、植栽の密度や高さのバランスを、整備後も維持管理の中で調整し続けることで、広場への愛着が育つ管理をめざします。

視覚（季節の彩り）/聴覚（葉音）/嗅覚（香り）/触覚（手触り）/味覚など
五感を刺激する記憶に残る風景体験を生み出す

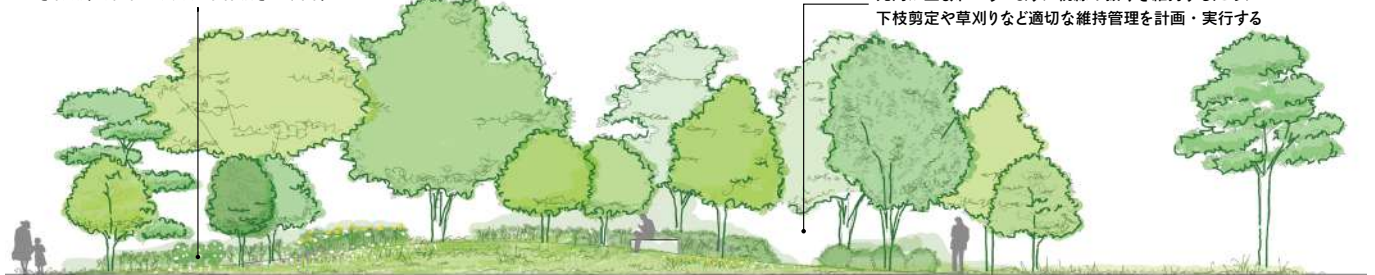


図 22 | 立体的な植栽密度感のコントロール（緑地広場部立面イメージ）

防災・減災

災害に備える広場となるために

新たに整備する緑地は、雨水を受け止める役割も担います（計画以上の降水量があった場合に余剰排水を受け取る役割）。都市型災害への備えとして、災害時には情報を発信したり、一時的に人が待機したりできる広場となります。また、番屋を中心にして、両再開発の一時滞在施設や帰宅支援対象道路である中山道とも連携できるようにします。



図 20 | 駅前の活動ごとを視認しやすい計画



図 21 | 道路沿いの植栽イメージ

死角が生まれづらいように視線の抜けを維持するために
下枝剪定や草刈りなど適切な維持管理を計画・実行する



図 23 | 災害時の周辺再開発建物と駅前広場の連携イメージ

マテリアル・カラースキーム

地域に根付いてきた色彩を活用

色彩の調査で分かった旧中山道沿いの地域の特徴的な色の傾向（赤系の色がよく見られる）を踏まえ、板橋駅西口周辺エリアのコンセプトカラーに「赤銅色（しゃくどういろ）」を選びました。舗装は、赤系のインターロッキングブロックや石材を採用します。照明柱、柵、番屋などの立ち上がりの施設群は、背景となる緑になじむグリーングレーで統一し、落ち着きと温かさのある駅前をめざします。



図 24 | 使用を検討している素材のサンプルボード

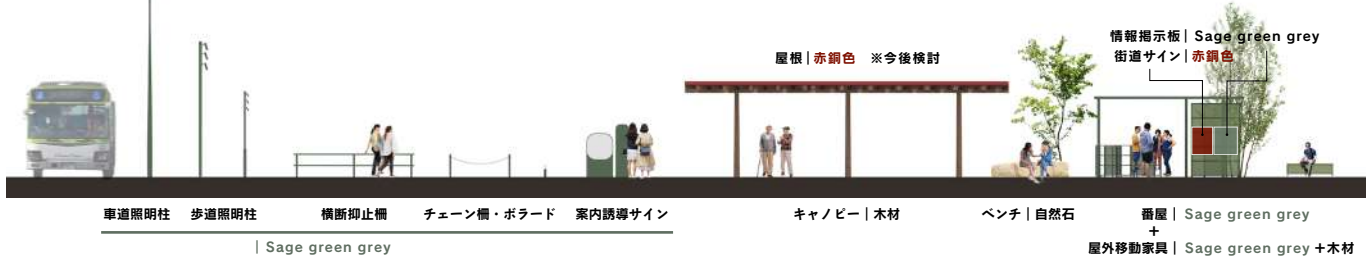


図 25 | 駅前広場にてできるストリートファニチャーの統一感ある色彩計画

サイン計画

シンプルでわかりやすい案内

空間の見通しのよさによる分かりやすさに加え、乗換えや駐輪場への案内・誘導のために、シンプルで分かりやすい案内誘導サインを計画します。

また、「旧中山道の第一の宿場町」という歴史を感じられるように、「街道サイン」を導入し、旧中山道沿いのエリアや、その背後に広がる加賀エリアへと誘います。

照明計画

安心感のある立体的な灯り

歩きやすくなる路面への灯りと、ベンチや樹木などの居場所の灯りを組み合わせた立体的な照明計画により、安心感のある夜間の空間づくりをめざします。また、深夜帯はエリア全体で減光に取り組むことで、環境にも配慮した計画とします。



A. ベースカラー

B. サイン形状ルール

あいうえお
アイウエオ
abcdefghijkl

図 26 | サインの考え方（色・形状・書体の統一）



図 27 | 夜間の照明計画イメージ

えんのもりスクール

区民、事業者、設計者、区職員が 混ざり合って、みんなで議論。

完成後の広場や施設を、どんなふうに使っていくのか、運営・管理をしていくのか。そのことを計画段階から考え、設計に取り入れていくために、R7年度から「えんのもりスクール」という“学びの場”を設けました（R7年度は計5回開催。R8年度以降も継続的に実施予定）。再開発と一体となった豊かな環境づくりに向けて、施設や空間の計画を進めると同時に、完成後の空間の「つかう」方法や「まもる」ための仕組みづくりを、区民、事業者、設計者、区職員が共に学び、議論しながらつけていきます。この学びの場を起点に、人と人をつなぎ、「まちのためにできること」を一つひとつ積み重ねながら、地域の運営体制（エリアプラットフォーム）づくりを段階的に進めていきます。実際に、スクール参加者がコアメンバーである市民団体（板橋駅まちづくり応援団）による、清掃活動や交流会といった活動も始まっています。



= 学びの場

えんのもり
スクール
en no mori school

「まちづくりに関するレクチャー」
「使い方のワークショップ」
「緑のイベント・まちあるき」

各回の開催レポートで
イベントの概要をご覧ください。



図 29 | レクチャーイベントの様子（講師：ツバメアーキテツ、いたばしプロレス）



図 30 | 緑のイベントの様子（講師：グリーンワークス）



図 31 | ワークショップの様子（令和7年度は計4回実施）



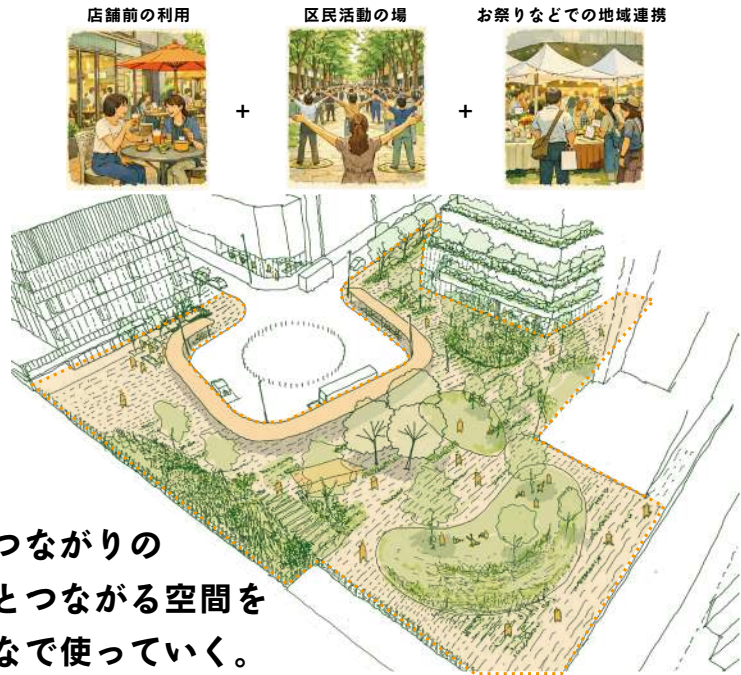
図 32 | まちあるきイベントの様子（講師：Veig）

一体的利用と維持管理スキーム

みどり豊かな駅前環境の価値を 地域と再開発とが共に育てていく。

一体的活用スキーム

西口駅前広場の再整備によって、板橋口地区と西口地区がひとつながりの空間となります。駅前に新たに広がる一体空間は、区民の誰もが活用できる新しいフィールドです。沿道店舗の店先の利用、区民活動での利用、お祭りなど地域と連携した活用など、この空間をみんなで活かして使っていただける場所になればと考えています。どんな使い方がされていくとよいか、今後も皆さまのご意見をお聞かせください。



ひとつながりの 地域とつながる空間を みんなで使っていく。

図 33 | 一体的活用のイメージ。複数の同時開催もできる

公民で連携した 維持管理スキーム

ひとつひとつの居場所がたくさんある緑豊かな駅前を継続していくために、維持管理の基盤をつくります。一体整備によって生み出された屋外空間をみんなで使っていくと同時に、区民はもちろん、民間企業、行政、商店街、町会、エリアマネジメント活動など、さまざまな担い手が連携して役割分担を行っていきます。さらに、広場のみどりを育てる活動に、誰もが義務感なく自由に参加できる開かれた場を用意することで、みんなで豊かな環境を守っていく仕組みを考えています。できるだけ楽しく関わりが広がり、魅力的な緑が育ち、維持されていくスキームをつくりあげていきます。

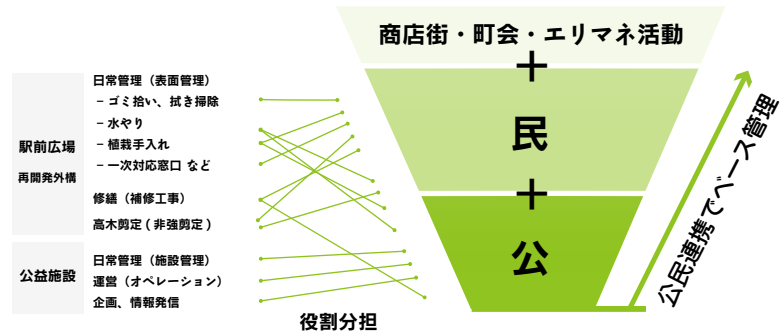


図 34 | 公民で連携した維持管理スキームのイメージ

今後の整備スケジュール

板橋駅西口周辺エリアでは、板橋口地区と西口地区の再開発事業が進んでいます。まず2027年に板橋口地区4階の公益エリアが先行して完成し、同年に、板橋口地区全体（住宅や商業施設等を含む）も完成します。

西口駅前広場の再整備は、2026年の実施設計を経て、2027年以降に工事に着手し、2029年の完成を予定しています。その際は、西口地区も含めた西口周辺エリア全体の「まちびらき」を行うことをめざしています。

	2025 (令和 7)	2026 (令和 8)	2027 (令和 9)	2028 (令和 10)	2029 (令和 11)	2030 (令和 12)
板橋口地区再開発事業		R4.12~工事着手	▼完了			
		建築本体工事	▼完了			
公益エリア(板橋口4階)	設計	工事	▼開設			
西口地区再開発事業		解体工事	工事			▼完了
西口駅前広場再整備	整備計画	実施設計	工事			▼整備完了

図 35 | 今後の整備スケジュール



発行 | 板橋区 まちづくり推進部 地区整備課

発行日 | 令和 8 年 4 月

電話 | 3579-2013

刊行物番号

R08-10

1 はじめに

板橋駅板橋口地区の区有地においては、隣接するJR東日本の用地との一体的活用を図るため、JR東日本及び野村不動産を施行者とする「板橋駅板橋口地区第一種市街地再開発事業」を進めている。

再開発事業で整備される建物内4階の公益エリアについては、建物が竣工する令和9年度の開設をめざし、「インターフォーラム構想」のコンセプトの下、令和6年度に策定した「板橋口地区公益エリア整備計画」を令和7年度に更新し、設計・運営の検討を進めている。

2 周辺動向について

板橋駅西口周辺地区について

(1) 地区の概要

- ①板橋駅板橋口地区 ②板橋駅西口地区
- ③板橋駅西口駅前広場 を含んだ区域であり、地区のにぎわい創出の拠点となっている。

(2) めざすべきまちづくり

- 板橋駅西口周辺地区まちづくりの将来像として、板橋区の玄関にふさわしいまち、誰もが暮らしやすく活気にあふれたまち、安全で安心なまちを掲げている。

(3) エリアマネジメント

- 市街地再開発事業や駅前再整備の完了後も、まちのにぎわいや魅力を持続的に広場向上させていくことを目的に、エリアマネジメントの導入を進めている。

(4) 板橋駅西口地区第一種市街地再開発事業

- 西口地区では、令和4年に再開発組合設立が認可され、令和6年度より解体工事に着手しており、令和11年度の工事完了を目指している。

(5) 駅前広場再整備

- 各施設老朽化しているため、事業が進捗している2つの市街地再開発事業との調和を図りながら、板橋区の玄関口にふさわしい駅前広場となるよう再整備を行う。



4 えんのもりについて

令和6年度までの検討

- 令和6年度整備計画で、板橋口公益エリア、西口駅前広場、近接するハイライフプラザ、この3施設一帯をえんのもりとした。
- 駅前広場再整備と連携し、ヒアリングやワークショップで得られた地域住民の意見や思いを反映している。
- ロゴデザイン・ロゴマークの作成



令和7年度での検討

(1) 運営体制

- えんのもりとして、一体運営するメリットの整理

公益エリア
→屋内・半開放型(セミオープン)空間

駅前広場
→屋外・開放型(オープン)空間

ハイライフプラザ
→屋内・個室型(クローズド)空間

それぞれ性格の異なる3施設



- 利用目的に応じた様々な活用ができることに加え、エリア内の施設を一体活用することで、大規模なイベントにも対応できる
- メンテナンス・運営の集約化により、効率的な運営が期待できる

3 板橋駅板橋口地区第一種市街地再開発事業 施設概要

本体建築物について

(1) 目標(地区計画より抜粋)

- 駅前になぎわいにぎわい・交流の拠点づくり。

(2) 事業推進体制

- 土地所有者：板橋区・JR東日本
- 再開発事業施行者：JR東日本・野村不動産
- 商業施設運営者(地下1階~4階)：アトレ
- 公益エリア(4階)テナント入居者：板橋区

(3) 施設概要

- 再開発事業で整備される建物は、住宅施設(6階~34階)、子育て支援施設(5階)、公益エリア(4階)、商業施設(地下1階~3階)

(4) 事業スキーム

- 板橋区がアトレに支払う公益エリアの賃料には、野村不動産からの地代収入を充当する。



建物完成イメージ

(2) ブランド発信拠点として

- 板橋駅は板橋の「玄関口」となる場所です。加えて、駅前広場は埼京線の車窓から望むことができ、区のブランド発信拠点として大きな可能性を持っています。

クリエイティブセンターとして

- 2026年1月、「みんなにかけ橋いたばし創造都市宣言」を行いました。区として「創造都市」を推進するなかで、えんのもり・公益エリアはこの中心的拠点(クリエイティブセンター)として、「板橋区の創造都市としての実践を世界と共有し、深化させる役割」を担っていきます。



- 令和8年度からは所管を創造都市デザイン課に移し、検討を推進していきます。
- 公益エリア(クリエイティブセンター)の活用について、庁内各課と連携した事業やイベントの検討・準備をしていきます。

5 公益施設内の諸室・利用イメージ

○家庭科室（仮）



書道教室など、水場が必要になるような地域活動のほか、ホール等での日常・イベント時の軽食に対応ができるようにします。

○アーカイブ室



イベントの制作物などを、展示・保管します。他スペースとともに使用し、小規模な展示企画を行うこともできます。

○スタジオ

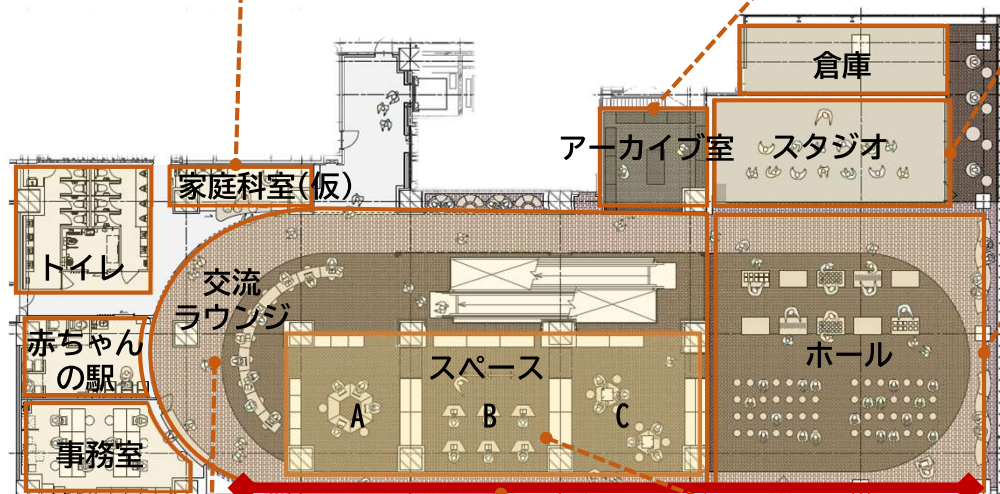


ダンスや音楽活動など、音が出る活動ができます。

○壁面素材（パンチングメタル）



活動やイベントの中で市民のみなさんと一緒に、施設を段階的にアップデートしていくことを想定しています。



○ホール



地域のイベント・商業催事・展示・トークイベントなどができる場所です。普段は駅前広場を眺めながら休める“居場所”としても使えます。

○主な諸室の規模

名称※	規模※
ホール	200㎡
スタジオ	90㎡
スペースA	40㎡
スペースB	55㎡
スペースC	50㎡
交流ラウンジ	285㎡
アーカイブ室	30㎡
家庭科室（仮）	20㎡

※ 名称・規模は計画段階のものであり、変更の可能性があります

○交流ラウンジ



自由な滞在ができるスペースとします。エスカレーター横にも少人数用ソファを設け、仕事や学習などを行うことができます。

○スペースA～C



工作・語学講座・会議など、少人数の活動を支える小割のオープンなスペースを3つ設けます。

○壁面展示スペース

交流ラウンジの事務室の隣からホールまで続く壁面は、40mほどにも及ぶ展示スペースとして利用できます。

6 スケジュール

年度	R6	R7	R8	R9	R10	R11
板橋口地区再開発事業			住宅引渡し	↓	商業施設開業	
公益エリア	整備計画	設計	工事	↓	開設	
西口地区再開発事業		解体工事			建物本体工事	工事完了
駅前広場再整備事業	整備計画	設計			工事	工事完了

○事業スケジュールに関して、再開発事業本体工事の進捗と並行しての計画検討となるため、工事スケジュールの把握、施行者との継続的な調整に努める。

○西口地区再開発および駅前広場再整備が完了する令和11年度以降に一元的な管理体制構築に向けて検討中。

板橋駅板橋口地区公益エリア整備計画

えん の もり



えん の もり

ここ板橋は江戸時代より日本橋から数え
中山道第一宿として栄えてきました。

人々が往来し、人と人が出会い、
様々な「もの」や「こと」が
縁あって結びつくところ。

涼やかな緑とともに人を見守り、
人を清らかにし、人に生気を
与えてくれるところ。

「ここへ来れば、気持ちが晴れる。」

「ここを通ると、気持ちが洗われる。」

板橋の玄関として、

多くの人にそう思われ

慕われていく場所でありたいと思います。



板橋区の玄関口のリニューアルに向けて、駅前のエリア全体を「えんのもり」と名付けました。人々が出会う宿場町としての歴史、縁がつながり新しいものに出会える学びの場、杜のようなみどりいっぱいの空間、地域の活動やまちの見守りといっためざすべき場所のイメージをネーミングに込めました。

森・環境・まち

約68万人近い人々が通勤通学で使っている。この駅前は、区が今後取り組んでいくべきエリアとして、豊かな環境を育て、守って共に維持し、高めていきます。まちづくりの仕組をつくり、職能含めて人々の暮らしを支える。板橋区の玄関口という立地を活かし



づくり

通過する埼京線。その車窓から見える森のような豊かな緑に包まれ、「緑によるまちづくり」を体現する場所になります。新たに生み出していくために、行政と再開発とが役割を分担しながら、場所の価値を、区民が義務感なく、自由に、この場所を活用し、手入れに参加できることで、地域産業を継続させるきっかけをつくります。板橋区、区のまちづくりを展示する場をめぐします。



地域活動・見守り

新しい駅前広場は、車中心から人中心の安全で、居心地のよい空間へとリニューアルします。新旧のコミュニティをつなぎ、「むすびのけやき」を中心に、地域活動による活気溢れる駅前をめざします。4F公益エリアと連動した活動の拠点を駅前広場内にも設け、周辺の商店街、町会、再開発と地域のお祭りなどでの連携も進めます。また、新しい駅前広場は、常日頃から人目があり、見守りされているような安心感のある場をめぐし、幼児から高齢者、身体障がい者、生物、植物まで、誰もが自由にアクセスできる場所をめぐします。



学び（縁・出会い）

板橋口地区4Fに整備される公益エリアは、駅前広場や既存施設、再開発と連動した施設で、目的ごとに空間を設けるのではなく、マルチファンクショナルなオープンスペースをつくり、テーマに合わせて空間を可変させることで、常に新しさがあり、マルチファンクショナルなオープンスペースをめざします。ホールの会議や学会での利用はもちろん、地域の方々が講師になった“人と出会う”ミニレクチャーなど、学びにつながるような地域活動を支えるとともに、小・中・高校生たちが日常的に勉強する場所としても利用できる設えにしています。



これまでの経緯

区民の活動フィールドを一帯に駅前全体が「まちの編集ひろば」

このプロジェクトは、板橋駅西口の板橋口に新築される板橋口地区再開発ビル4階に新しく整備する公益エリアをどのようなものにするべきかという議論からはじまりました。

これまで区の公益エリア整備計画は「インターフォーラム」というコンセプトの下、「教え学び合うエリアマネジメント」「働くビジネス（インキュベーション機能）」「ブランド発信（ホール機能・交流機能）」の3つを柱に方向性が検討されてきていました（図1）。そして今回、その構想を引き継ぎながら、図2のように、施設をガイド・編集する視点を加えたコンセプトに更新しました。新しい公益エリアを施設単体で計画するのではなく、駅前広場、既存施設、2つの再開発ビルと連携しながら、より良い公益エリアのあり方について検討していくことにしました。

ワークショップやヒアリングでの区民要望の調査を行い、周辺の再開発事業者との連携（事業者ワークショップ）、駅前広場と公益エリアの連携、近接するハイライフプラザを含めた合理的な役割分担についての、具体的な議論を重ねながら、周辺と連携した有効活用、目的を達成する用途整理を実現できる公益エリア整備計画をアップデートすることができました。

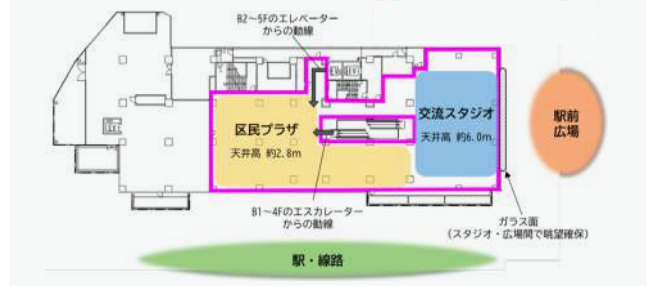


図1 | インターフォーラム構想

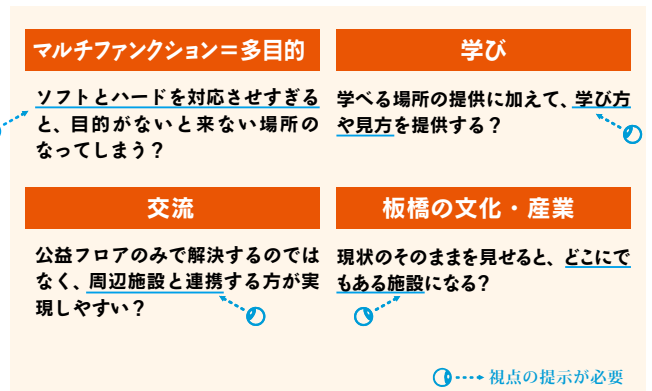
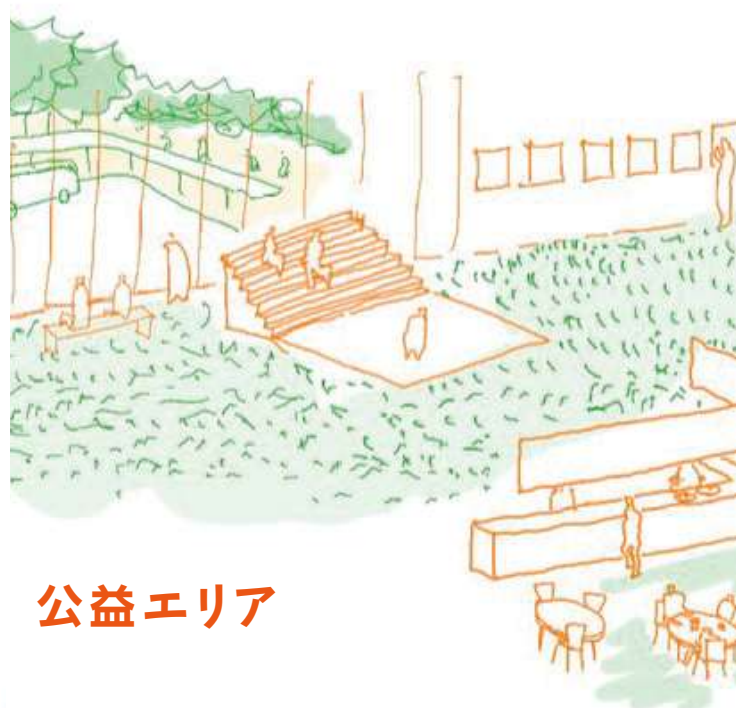


図2 | インターフォーラムのコンセプトの更新

検討経緯	
1992	「国際交流」を目的に取得
▼	
2018	隣接するJR東日本用地と一体開発のための協定を区とJR東日本とで締結
▼	
2018	野村不動産株式会社を共同事業者として選定（JR東日本・野村不動産を施行者として再開発事業が進行）
▼	
2022	再開発・建築工事着手
▼	
2023	インターフォーラム構想が示すマルチファンクショナルな区の玄関口において「知と文化の交流拠点」を実現する上で、公益エリアの機能として「区民プラザ」と「交流ラウンジ」の設置を検討してきた。テーマは、①交流・②知識・③文化
▼	
2024	周辺の施設との連携、ワークショップ、ヒアリングを通じた区民の要望調査、収益構造の精査、区内の類似施設の利用状況の調査・検討を踏まえた計画コンセプトの更新

「まちの編集ひろば」



公益エリア

図3 | 施設コンセプト

施設コンセプト

「まちの編集ひろば」

これまでの施設のコンセプトに、「施設をガイド・編集する」という視点を加えました。「マルチファンクション」のスペースをよりオープンにすることで、利用のテーマや用途に合わせて空間をアレンジできるように、施設内の什器を可動にすることとしました。また、いくつかの時間軸で地域を編集して、わかりやすくその時々生き生きとしたまちの様子・魅力が伝わっていく企画・発信を行います。板橋口地区再開発ビルの4階につくられる新しい公益

エリアは周辺の再開発ビル、駅前広場、既存の公共施設と連携しながら、区民の様々な活動や交流の場にしていきたいと考えています。施設の企画や活動によってさまざまなコト・モノ・ヒトをつなぎ、そこで生まれる新たなコンテンツが編集・発信されていくことをめざすことから、施設コンセプトを「まちの編集ひろば」としました。駅前広場、ハイライプラザと合わせると内外にさまざまな活動に対応できる空間が広がることとなります（図3）。

マルチファンクショナルな オープンスペース

目的ごとに空間を設けるのではなく、「マルチファンクショナル」なオープンスペースをつくり、**テーマに合わせて可変させる**ことで、常に新しさがあり、わざわざ来たくような空間

再開発・駅前広場と連携する 公益エリア

板橋口地区4階公益エリアにとどまらず、**再開発商業施設と連携、駅前広場と一体的に捉える**ことで、様々なタイプの活動・交流を実現。

複数の時間軸で地域を編集

板橋の魅力や特徴を「編集」し、変わらない価値（長期的）に触れられると同時に、変わっていく価値（短期的）を継続的に見せることで、**いきいきとしたまちが伝わる**ような取り組みが必要。



用途・規模

さまざまな地域活動を支え、区のまちづくりを展示する場

新施設には 200㎡以下の活動を中心に

公益エリア全体を再編するにあたり、収益構造を分析し、類似する公共施設の利用状況を把握することで、再計画を行ってまいりました。

公益エリアの収入は、その多くはホールの貸し出しであること、それ以外の貸し出し機能については、収支に大きな影響がないことがわかりました。そこで、ホール機能以外を公益的な活用を促進させていくスペースと位置づけ、新しい公益エリアに組み込むことが、市民の皆さまの活動にとっても有意義であると考えました。

区の過去3年分の全体の施設利用状況を見ても、利用頻度が多いのは 200㎡以下の活動（主な活動は会議利用、趣味の活動などで、50～100㎡程度）であることがわかりました。200㎡以上の床面積を区民が借りる頻度が低いことから、使いやすさの観点から 200㎡以下の貸し出し機能を充実させる計画としました。

200㎡以上のイベントごとの際は、再開発ビル内の商業施設と4階ホール、駅前広場などを連携させるエリアマネジメントによる有効活用で補完していく可能性が、事業者とのワークショップを通して見えてきました。更に近接する位置に 400㎡規模のホールを持つハイライブラザもあります。既存公共施設と新しい公益エリアとの使いわけを行うことで、各々の施設を効率的に連携して活用できるように整備します。

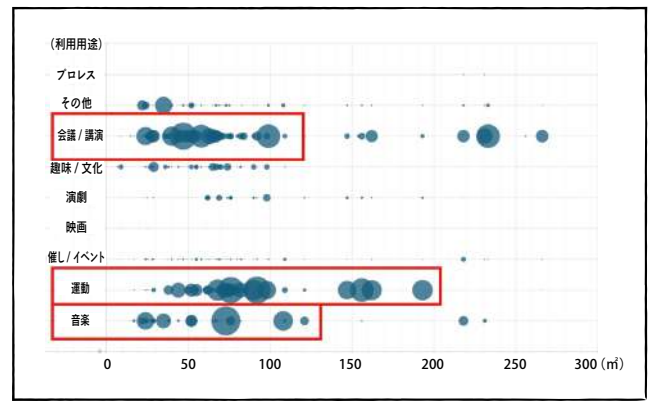


図4 | 板橋区の類似する公共施設の利用状況

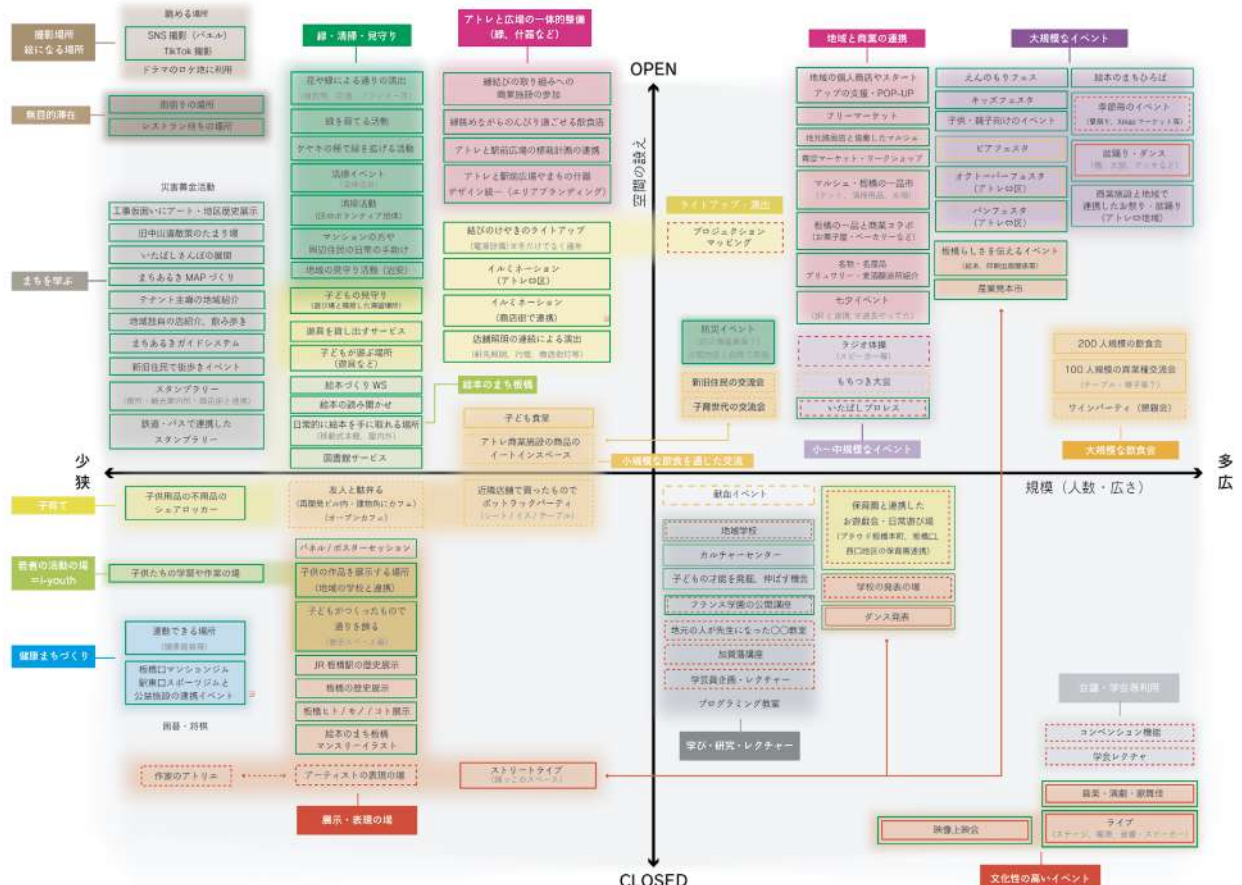


図5 | 区民や事業者とのワークショップや地元ヒアリングでの意見をプロット・カテゴライズ



図6 | さまざまなステークホルダーの意見と3つの方針

3つの方針で、区民のさまざまな活動ごとを促進

公益エリア全体で行われる、さまざまな活動ごとをシミュレーションし整理することで、3つの運用方針を導き出しました。

学び（縁・出会い）

会議や学会利用はもちろん、板橋西口地域にいる方々が講師になったのレクチャー、文化性の高いイベントなど、ホールを活用しながら「学び」につながる活動を誘発していきます。

地域活動・見守り

エリアマネジメント的な活動の拠点となるよう、板橋口地区4階の新しい公益エリアの区民プラザを小さなスペースに分割し、より多くの人に使えるようにしていきます。中高生たちが勉強する場所としても利用できる設えにしていきます。

森・環境・まちづくり

区が今後取り組んでいく「緑によるまちづくり」「絵本のまち」の柱となる施策の内容を展示・PRする場所としても機能する計画を行っています。



目的に合わせた空間利用

さまざまな活動が心地良く同居できるスペースの配置

板橋口地区に新しく建つ商業施設の上階へと上がると、4階に新しい公益エリア（市民のためのスペース）が広がります。そこには、区の取り組みを紹介するスペース、地域活動に使えるスペース、地域や商業施設と連携したイベントや催しができるスペースが、設けられます。用途に合わせてレイアウトを変えながら使うことができ、さまざまな活動が共存できる広場のような施設をつくります。

公益エリア（屋内）と駅前広場（屋外）は、デザインを

そろえて“ひとつながり”に感じられるようにします。そうすることで、4階へ自然に足が向きやすくなり、天候に合わせて屋内外を選んだり、屋内外をつないだイベント運営もしやすくなります。屋内外で素材や色味に共通性を持たせること、屋内の動かせる家具を屋外でも使えるようにすること、駅前広場側に公益エリアと連携する拠点（番屋）を設けることによって、屋内と屋外が一体となり、さまざまな活動が混ざり合う場所をつくっていきます。

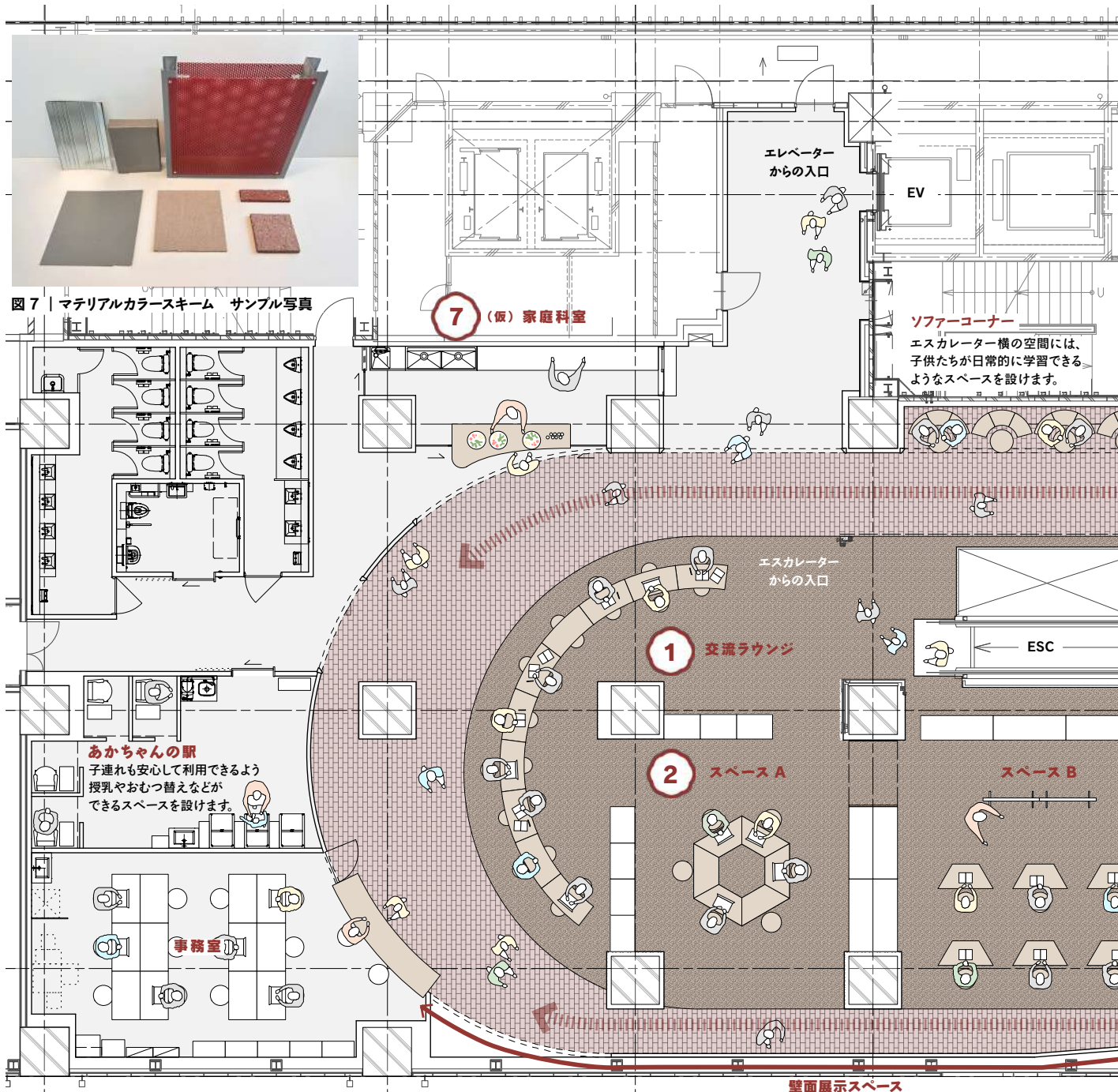


図8 | 公益エリアの施設構成とレイアウト S=1/150

1 交流ラウンジ、壁面展示スペース

南側にラウンジのような自由な滞在ができるスペースを設けます。さらに、交流ラウンジからホールの周囲を回遊できるよう、ひとつながりの壁面を展示スペースとしました。中心部ではさまざまな活動が行われながら、壁面の展示が共存できます。区の取り組みを紹介する企画展示や、区民の活動の発表の場など、幅広い用途で活用できます。

2 スペース A・B・C

工作、語学講座、会議など、少人数の活動を支える小割のスペースを3つ設けます。活動の規模に応じて、スペースを組合わせて使うこともできます。

3 展望・休憩スペース

駅前広場への眺望が開ける窓際のスペースは、日常時、ホール利用時アクセス可能なベンチを設けた休憩スペースを設けます。

4 ホール

地域のイベントや商業催事、展示にあわせたトークイベントなどができる場所です。ふだんは、駅前広場を眺めながら休める“居場所”としても使えます。

5 アーカイブ室

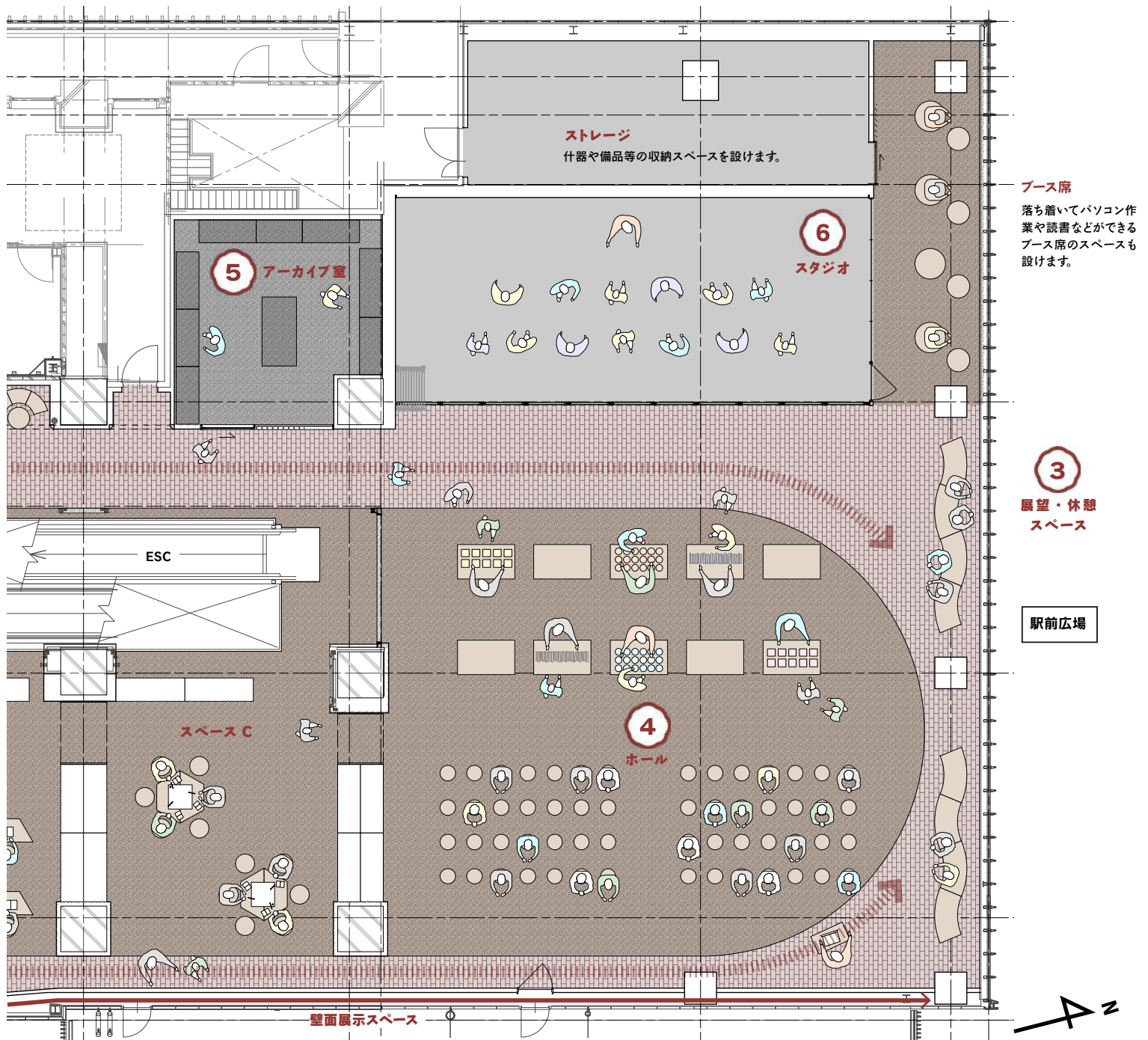
区民のみなさんの活動で生まれた制作物などを、一定期間見せながら保管できるアーカイブ室を設けます。壁面展示だけではなく、アーカイブ室を使った小規模な展示企画を行うこともできます。

6 スタジオ

ダンスなど音が出る活動にも使えるスタジオを設けます。

7 (仮) 家庭科室

書道教室など、水場が必要になる地域活動もできるように、(仮)家庭科室を設けます。最小限のキッチン設備を設置することで、ホール等での日常・イベント時の軽飲食の給仕等にも使えるようにします。



ゆったりと過ごし、活動できる日常と、 さまざまな使い方にも対応するホール

エスカレーターやエレベーターで4階へ上がり、公益施設のエントランスを入ると、スペースA・B・Cや交流ラウンジで活動する人たちの姿が目に入ります。エスカレーター横には少人数で落ち着けるソファ席を、北側のスタジオ奥には一人でも使いやすいブース席を設け、さまざまな世代の方が滞在しやすい空間を目指しました。目的がはっきりしない時でも、誰もが気軽に立ち寄り、過ごしやすい施設となることを目指しています。また、北側のホールは、普段は駅前広場を眺めながら思い思いに過ごせる場所として、イベント時には活動に合わせて多様に使える空間として活用できます。



図9 | 公益施設エントランスから見た全景



図10 | 約40メートルに渡る展示壁面の展示イメージ



図11 | スペースA・B・Cの利用イメージ

図12 | 北側には休憩スペースと奥にテーブル席を設ける

使いながら、 育てていく施設のデザイン

この施設は、使いながら徐々に手を加え、育てていくことも大切にしています。そのため、壁面にはパンチングメタルを採用し、フックや棚板、サインなどを、使い方に応じてその都度取り付けられるようにしました。活動やイベントに合わせて少しずつ要素を加えながら、市民のみなさんと一緒に、施設を段階的にアップデートしていくことを想定しています。



図13 | パンチングメタル壁面に棚やフックを付ける仕組み



図 14 | 上：ホールの利用イメージ1（音楽イベント） 図 9 | 下：ホールの利用イメージ2（レクチャーイベント・展示イベント）



図 15 | ホールの利用イメージ3（スポーツイベント）



図 16 | アーカイブ室の利用イメージ



図 17 | スタジオの利用イメージ



図 18 | （仮称）家庭科室と交流ラウンジ

運営スキーム

板橋の玄関口の3施設を一体運営し、区のブランド発信拠点に

板橋区の南部に位置し都心に近い板橋駅は、旧中山道エリアやその先の加賀地域へとつながる、板橋の「玄関口」となる場所です。山手線に次ぐ乗車数（約68万人/日）を有するJR埼京線の車窓からは、みどり豊かな風景も見え、区のブランド発信拠点として、大きな可能性を持っています。

板橋区では、駅前に隣接する新しい公益エリア、リニューアルされる西口駅前広場、既存のハイライフプラザという、性格の異なる3つの公共施設を一体的に運営していきます。3施設をひとつのまとまりとして捉えることで、区のブランド発信拠点としての発信力を高めるとともに、日常利用から大規模イベントまで、幅広い使い方に対応できる体制を整えます。

あわせて、メンテナンスや運営の集約化、一部業務の区直営化も視野に入れながら検討を進め、コスト削減とサービスの質の向上を目指します。

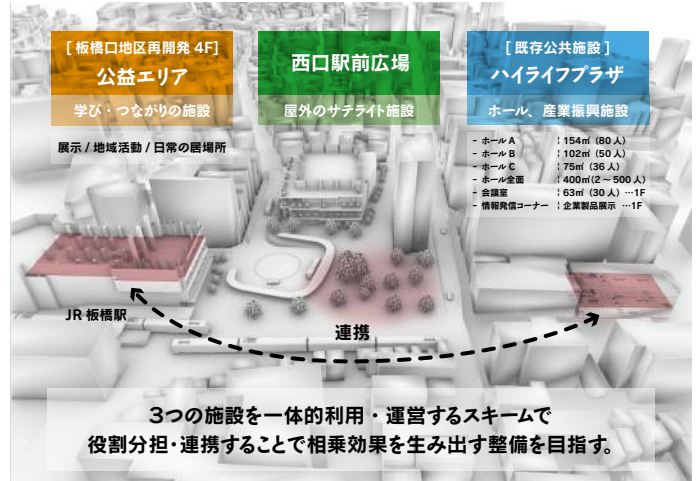


図19 | 板橋口地区再開発4階公益エリア、西口駅前広場
既存のハイライフプラザの3つを一体的に運用する

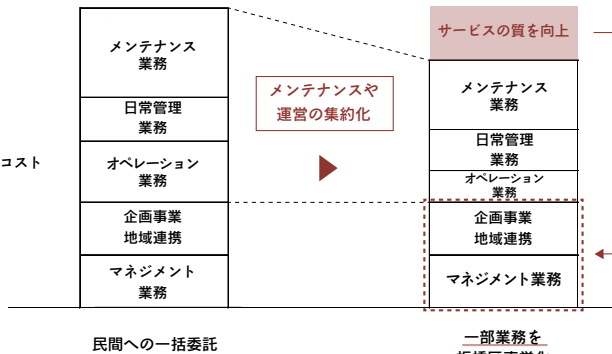


図20 | 業務の直営化などによるコスト削減とサービス向上を目指す



図21 | 公益エリアと駅前広場が連携し、
可動式家具などを移動させてイベントにも対応する



図22 | 埼京線からは公益エリアや駅前広場で行われるさまざまな活動ごとが見渡せる

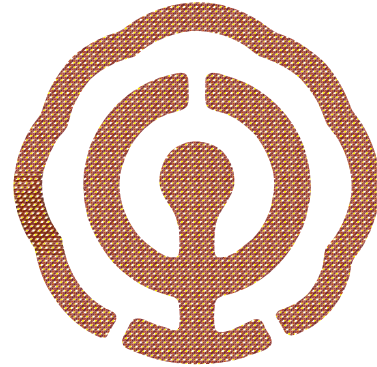
ネーミング、ロゴデザイン

新しい板橋の玄関口のネーミング「えんのもり」

新しい商業施設4階につくられる公益エリア、リニューアルされる西口駅前広場、既存施設のハイライブラザの3つを一体とした場所のネーミングを「えんのもり」としました。

人々が出会う宿場町としての歴史、縁が^{えん}つながり新しいものに
出会う^{もり}学びの場、社のようなみどりいっぱい空間、エリアマ
ネジメントによる地域の活動ごとの見守り、といったエリア全体の
運用イメージをひとつのネーミングに込めました。

ロゴマークは、年輪や円（^{えん}縁）を感じさせるやわらかなデザイン。
色は、さまざまなものが混ざり合う駅前広場のように、いく
つものラインが交差して混ざりながら色を発色します。



えんのもり
en no mori

創造都市の中心的拠点

クリエイティブセンターとして

板橋区は、2026年1月に区民一人ひとりの創意を原動力とし、あたたかでやさしいつながりを創り出す「創造都市 (Creative City)」であることを宣言しました。印刷・製本産業の集積と、ポーラとの40年の交流が育てた絵本文化を土台に、「デザイン=潜在的な価値を誰もが理解し活用するための知恵」という独自の定義のもと、まちづくりのさまざまな領域でデザインの取組を実践してきた都市として、ユネスコ創造都市のデザイン分野での加盟を目指しています。

えんのもり・公益エリアはこの中心的拠点（クリエイティブセンター）として、“板橋区の創造都市としての実践を世界と共有し、深化させる役割”を担っていきます。



図24 | 展開イメージ(グッズなど)

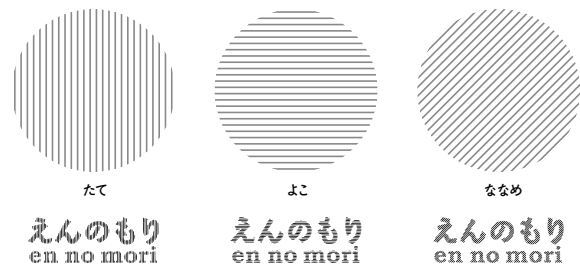


図23 | ロゴの考え方

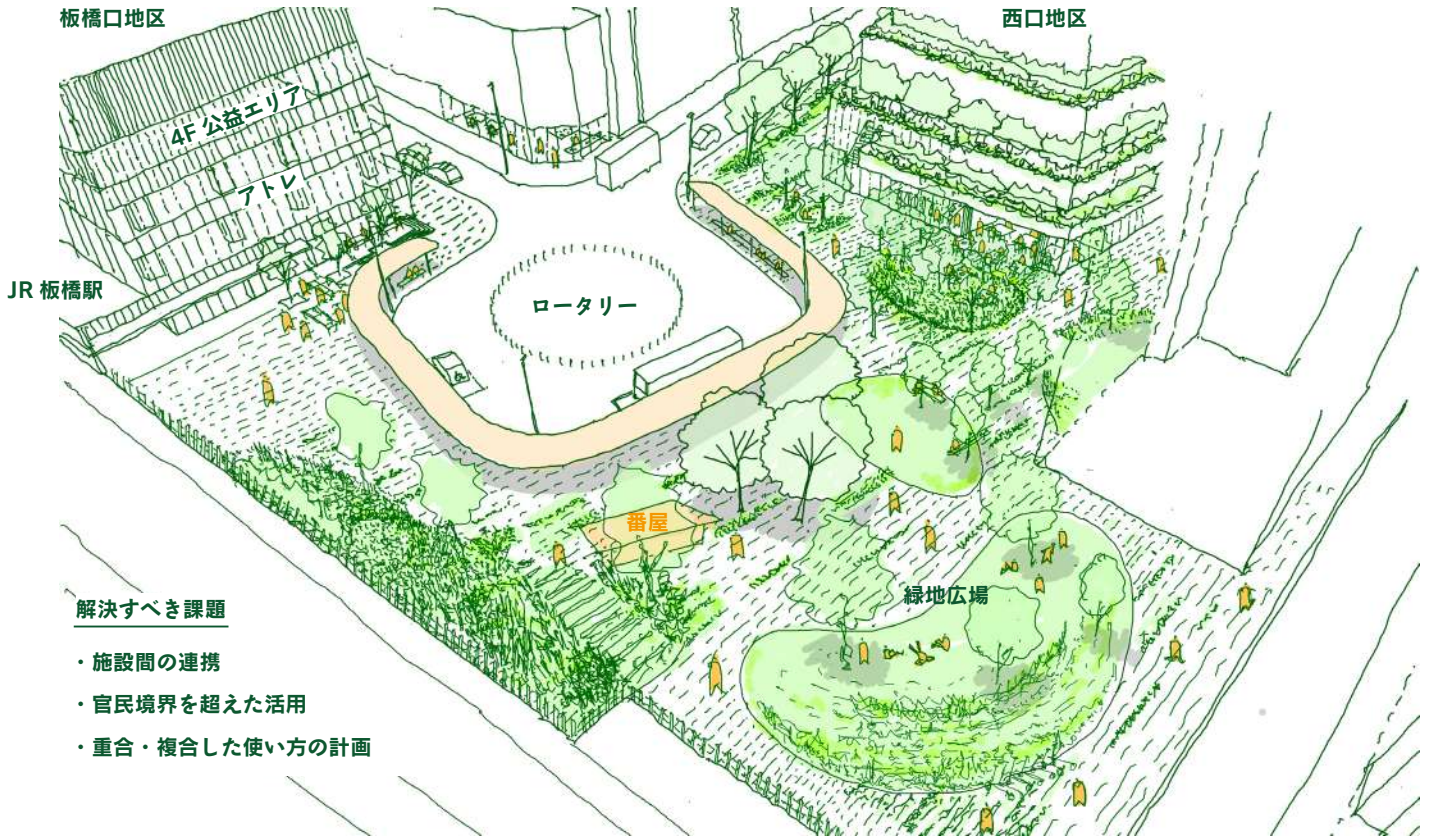
たて/よこ/ななめの線が混ざり合い1つの文字になる。



図25 | 展開イメージ(サイン、イベントの法被など)

輪っかを共通の要素とした、バリエーションあるデザイン。柔軟な運用で、まちと連携するきっかけをつくります。

各事業者が「まち」のためにできること 施設と広場の境界をこえた心地良い駅前広場を



解決すべき課題

- ・ 施設間の連携
- ・ 官民境界を超えた活用
- ・ 重合・複合した使い方の計画

図 26 | 再開発商業施設と連携した公益エリアと駅前広場

駅前広場とその周囲の再開発事業で建てられるビルは、デザインを揃えることはできても、ビルの前に広がる広場をどう活用するかという具体的なイメージが完成後に議論されるため、アクティブな活用につながらないことが多いのが現実でした。そこで今回は、計画段階から官民境界をこえた活用、施設間の連携がスムーズに進められるように、事業者を集めたワークショップを行うことで、まち全体として彩り豊かで、利用者にとって使いやすい駅前空間を実現するスキームを検討しています。

JR × アトレ × 野村不動産 × 板橋区



図 28 | 事業者ワークショップの様子 (R6 板橋口地区)



図 27 | これまでの板橋駅西口周辺エリアのまちづくりをめぐる議論の経緯

大京 × 三井不動産 × 三菱地所 × 安田不動産 × 板橋区



図 29 | 事業者ワークショップの様子 (R7 西口地区)

再開発と地域との連携 工事中から完成後までを見据えた連携の進め方

令和6~7年にかけて、板橋口地区・西口地区それぞれの事業者と、「まちのために、連携してできること」を話し合ってきました。あわせて、区民のみなさんと、駅前広場や西口周辺エリアで「どんな活動ができればいいか」を一緒に考え、意見を交わしてきました。

複数回のワークショップを通して見えてきたテーマは、「維持管理」「地域連携」「情報発信」「防災・防犯」の4つです。これらを、【STEP1】工事中からできること／【STEP2】完成に向けてできること／【STEP3】完成後に続けていくことの3段階に整理したものが、下の図です。「清掃活動」や「みどりを育てる活動」、「パトロール」、そして「仮囲いを使った情報発信」などは、まず小さく始め、少しずつ活動を重ねながら、必要に応じて体制（つながりや役割分担）を整えていく予定です。令和11年のまちびらきを見据え、その後も活動が続き、広がっていくように、再開発と地域が連携したまちづくりにつなげていきます。

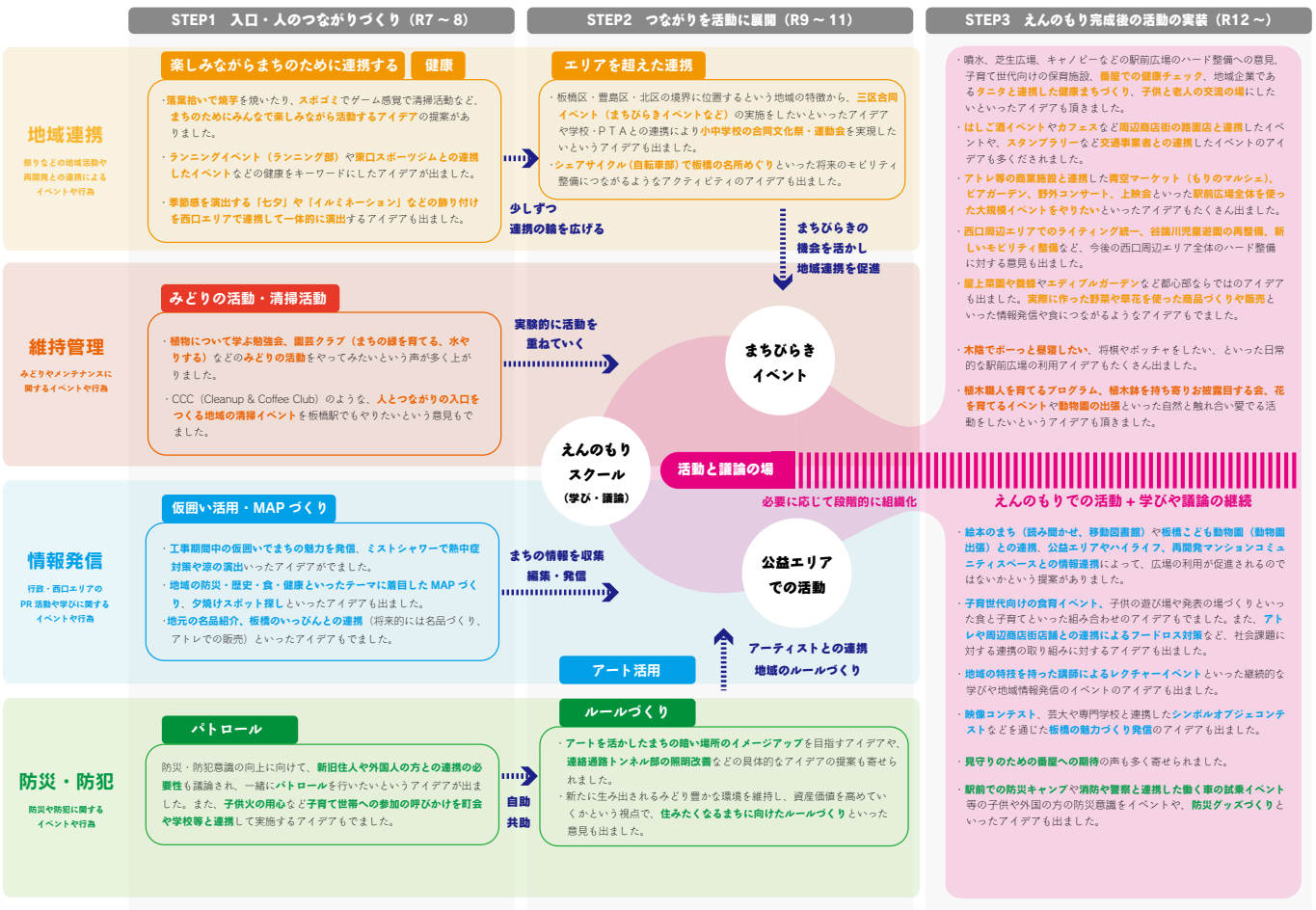


図 30 | 板橋口地区・西口地区との事業者ワークショップの結果と区民向け「えんのもり」使い方ワークショップの結果をまとめた活動連携プロセス

今後の整備スケジュール

令和9年の完成に向けて、令和7年以降も引き続き、設計・工事発注・監理を進めていきます。並行して運営にむけた準備、西口駅前広場の詳細設計と連携しながら、「えんのもり」の運用・維持管理の検討も深化させていきます。

図 31 | 今後のスケジュール

	2025 (令和7)	2026 (令和8)	2027 (令和9)	2028 (令和10)	2029 (令和11)	2030 (令和12)
板橋口地区再開発事業	R4.12~ 工事着手 建築本体工事		住宅引き渡し 商業施設開業			
公益エリア	設計	工事		開設		
西口地区再開発事業		解体工事		工事		開設
西口駅前広場再整備	整備計画	設計		工事		整備完了



発行 | 板橋区 政策経営部 創造都市デザイン課

発行日 | 令和8年4月

電話 | 3579-2515

刊行物番号

R08-09